

土

淨

號 月 四

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 毎月一回（日發行）
昭和十六年三月廿日 印刷本 昭和十六年四月一日發行

第七卷 第四號

特輯 花まつり

金

陸海軍 慰問浄土 病院

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願い致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◇一口一圓二十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◇毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◇個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◇御送金は浄土宗務所事務部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

所務宗土淨

振一 替五 口一 座一 東一 京番

東芝 京公 芝國 區地

右京權大夫隆信筆 原本知恩院所藏

國寶

法然上人御影

堅壹尺四寸・横八寸
絹寫眞・布ス版
精巧典雅十數度刷

!! 申込み殺到!! 殘部僅少

本會は創立以來、夙に法然上人の御眞影頒布の急務なることを痛感し、京都知恩院所藏にして畏くも後白河法皇の勅旨により、藤原隆信朝臣の筆になつた相好端嚴、筆致精巧を極めたる國寶「法然上人御影」の複製企劃を進めてゐたが、時恰も淨土宗青年會聯盟でも明せずしてこの議が起り、茲に一致協力してこれが作成に着手し、種々苦心の結果、完成を見るに至つたので、本會は早速全國の支部に配布したところ果然! 一般會員よりの申込み殺到のため、更に偉大なる上人の御風采を普く同志とともに拜すべく、特にこれが實費頒布を斷行してゐるが、驚く程多數の申込に接し、既に殘部は幾何もない。

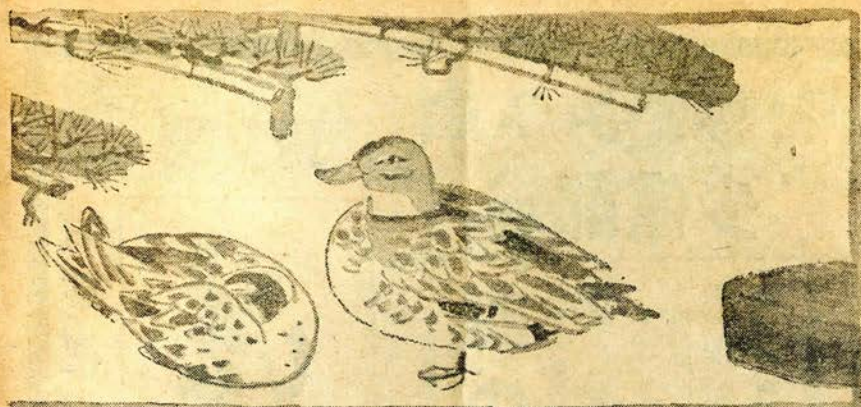
申込所

東京市芝區芝公園明照會館内

法然上人鑽仰會

一葉實費金壹圓 (送料簡代)

振替東京八貳壹八七番
電話芝(43) 一三五二・〇八四〇



浄土四月號 目次

表紙

鈴木金平

扉・目次カット

中島保

信の宗教……………江藤澁英(六)

小さな悟り……………吉田絃二郎(四)

寺院巡り 鎌倉の光明寺……………轉法輪行念(三)

隨筆花まつり

市民生活と花まつり……………三木清(一〇)

花祭の思ひ出……………村田嘉久子(三)

七 あゆみ……………金田明進(三)

花まつりと隣組……………生田花世(七)



「われらの實踐」座談會

信

仰

相

談

中村辨康 (四)

歌

壇

與謝野晶子選 (九)

俳

壇

太田耳動子選 (一九)

柳

壇

西島 ○ 丸選 (元)

浄土まんが

南進熱ここかしこ

新漫画隊 (四)

創作

美

し

き

島

北林透馬 (三)

先師を語る

道重信教上人 増谷文雄

(二)

佛教修養

五重相傳の受け方

中村辨康 (五)

會

員

通

信

(五)

編

輯

後

記

(六)

浄土 四月號 目次

新發賣

一日二球で健康量

理研製品



肝油を精製した
純ビタミンAD

肝油が効くのはビ
タミンAとDの爲
だと判つてゐる今

日、魚油のまゝの肝油で我慢する必要はあ
りません。本品は肝油から精製抽出したビ
タミンAとDを無味無臭のグロビュール球
に收めた快適な製品——肝油の効果は完全
に数十倍に強化され且快適化されました。

合理的な新製品

新製品理研ビタミン球は、最近のビタミン學
說に據り、一日二球づゝ服めば完全に生理的
健康量を満たせる様に、一球ビタミンA五千
D一千國際單位を含有させた製品。しかも
青豆ほどの小球です。

一月量 六〇球 二圓

品切の節は總代理店へ

總代理店
株式會社
玉置商店
振替東京七二番

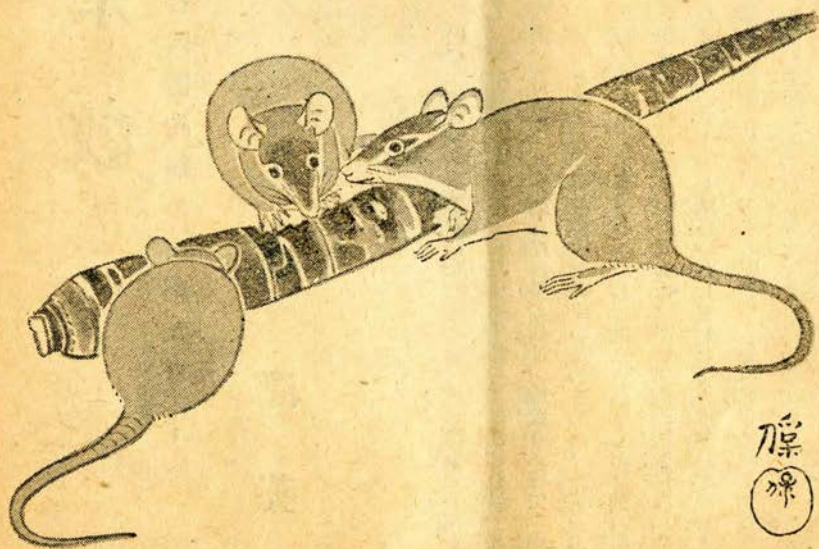
理研 ビタミン 球

淨土

四月號

およそ生死をいづる行一つにあらずといへども、まづ極樂に往生せんとねがへ、彌陀を念ぜよといふ事、釋迦一代の教にあまねくすゝめ給へり。

法然上人御法語





信の宗教

— 陣中に讀む阿彌陀經の有がたさ —

江 藤 澂 英

聖戰第五年、北は露滿國境の警備から、南は佛印の進駐まで、陸に、海に、空に、皇軍百萬の將士の中には、法衣を戎衣にかへて征旅についてゐる、わが淨土宗の僧侶は現に〇〇〇名の多數に達しております。毎年これ等の宗侶勇士に對し管長親下の名に依つて、宗務所並に各本山が協同して、犒勞の微意を捧ぐるために慰問袋が送られております。昨年暮に送られたものには、本誌を初め宗内の讀みものと共に、「掌中阿彌陀經」が入れたのであります。阿彌陀經は吾々淨土宗侶には一切經の中で、一ばん親しい懐しい聖典であります。陣中の宗侶諸師には殊の外難がれたやうであります。佛印進駐中の一宗侶からの謝狀には次のやうに認めてありました。

○ 阿彌陀經有がたく頂戴いたしました。亡き戰友の英靈を弔ふべく、陣中袈裟をかけて、打ち鳴らす鑼とてはなけれ共、香偈、三寶禮、四奉請、略懺悔と私は型の如く、聲張りあげて「佛說阿彌陀經」と諸佛證誠の護念經を拜讀いたしました。今更ながら讀誦正行の有がたさが眞に心に徹して覺えられました。讀み慣れた聖典だけに流暢に讀み終りました。聞いてゐた戰友達は「流石に甘いものだなア」と感心いたしました。大聖釋尊が准一人の舍利弗を對告衆として、三十七度までもその名を呼ばせられて、念佛往生を力説し給ふた妙旨も、今日はじめて心ゆくまで背かれまして。殊にその後半、所謂六方便に於ける諸佛の證誠護念は、何と

偉大なる構想でありませう。今、私が進駐してゐるこの地上に續く遙かな西のかなた、廣茫たる印度の大陸を横斷する大流恒河の眞砂の數、到底それは私達の算數譬喩の及ぶ所ではないが、それにも等しい無量の諸佛たちは、各々その本國たる東西南北上下の六方世界に於て、三千大千世界を徧覆せるやうな、廣長の舌相を出して、念佛往生の誠實なることを説いておられるのであります。今までは何の氣もなしに讀んでゐた、「舍利弗、汝我今者讀嘆阿彌陀佛不可思議功德」といふ釋尊の大讃嘆が、有がたくて有がたくてなりませんでした。(下略)

この勇士は大正大學で淨土學を専攻した方で、經典の解釋も學問としての研究はこれまでに出來てゐたのであるが、戰線に立つてこの聖典を手にし、これを味讀するに至つて、必々とその有がたさを覺えたのであらう。私はこの勇士に衷心からの隨喜を禁じ得ないのであります。さうして私自身もこの手紙に導かれて、今更乍ら阿彌陀經を讀み直して見たのであります。眞に有がたいお經であります。宗祖法然上人も阿彌陀經はたゞに念佛往生を説くばかりでなく、彌陀の四十八願は盡くこの一小經中に含まれてゐると、委しくその内容を讃仰しておられます(勅傳第廿四卷)。

さうして上人は漢音、吳音、訓讀と毎日この阿彌陀經を三様に讀誦されたといふことであります。

淨土宗に於ては、釋尊一代所説の聖經中、無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經、これを淨土の三部經と稱し正依の經典として、これを讀誦し、これに隨順し、これに信賴するを讀誦正行として尊ぶのであります。私は就中この阿彌陀經こそは、僧俗を問はず淨土教徒として極樂往生を願求するものは讀誦すべきであると思ひます。阿彌陀經は短い簡單な聖典であります。釋尊が涅槃間近となられたにかゝらず、お弟子の中でも智慧第一と稱せられた舍利弗を相手に説法せられ「舍利弗よ、此を去る十萬億の西方に汝を待つ淨土がある、一心に佛名を稱して往生せよ」と、極樂の比類なき莊嚴と諸佛の證誠護念を懇説しておられます。然し舍利弗は終始默然として一語も口を開いておりません。實にこのお經は全く釋尊の無問自説で終り、舍利弗はたゞ歡喜信受して居るのであります。私はそこに尊い舍利弗の相貌が髣髴として偲はれるやうに感じます。智慧の代表者たる舍利弗もかくしてこそ初めて信の宗教に依て救はれてゐるのであります。私達も彌陀の大悲本願のみ前には唯だひれ伏して、宗祖法然上人の示された如き謙

虚そのものになつて、救済のみ手に攝取さるべきであります。

これにつけても思ひ出されるのは、舍利弗と目連に關する本生譚であります。昔、ある國王が、善美をつくした宮殿を新築した時、大廣間の兩側の壁書を畫かすために二人の畫家が雇ひ入れられたのであります。さうして永い月日の間、この二人の畫家は各々一面を擔當して丹精を凝らしてゐましたが、一人の方は見ごとな山水の風景を描き上げたのであります。然るに一人の方はたゞ明けても暮れても壁面を磨いてゐるのみで何ら繪畫らしいものも出来てゐないのであります。かくて定めの期間が盡きた時、大王は親しく檢分して一方の山水畫に對しては賞讃されたのであります。一方に對しては非常に逆鱗されたのであります。ところがその畫家は大王に對して「私の畫は心畫であります、心の繪筆で描いたのであります、何卒心を靜めてよくご覧下さい」と申し上げたのであります。そこで大王は靜かに後方に退いて壁面を凝視いたしますと、宛然薄紗を隔てゝものを見るが如く、美しい風景が顯現し、その中空には自分の姿まで見えたので、大王も非常に感嘆せられたのであります。これは磨き上げられた壁面に他方の繪畫が映寫されたのであります。

釋尊はこの譚をせられて、筆を執つて山水を畫いたのは目連で、唯だ磨いてゐたのは舍利弗であると申されました。畢竟、目連は行の人であり、舍利弗は智の人であることを教へられたのであります。智は磨くもので、そこに光が現れるのであります。しかもその智の代表者たる舍利弗も、最後にはたゞ本願の念佛を歡喜信受して法悦の身となつてあります。私達の宗教は自力で描き上げる行ではなく、たゞ自己の清淨なる信水に映ずる、佛の本願に絶り淨土に往生する信の宗教であらねばなりません。

(筆者は淨土宗務所教學部長)

陸海軍慰問雜誌淨土

寄附者芳名(敬稱略)

- | | | | | | | | |
|-------|-----------|-----------|-------------|---|---|---|---|
| 二百 | 圓 | 京都市東山區林下町 | 京 | 都 | 吉 | 水 | 會 |
| 十 | 圓 | 京都市東山區林下町 | 教師養成所職員生徒一同 | | | | |
| 一圓二十錢 | 東京市王子區赤羽町 | 涯 | 野 | 正 | 二 | | |
| 二 | 圓 | 朝鮮鎮南浦府三和町 | 濱 | 田 | 鶴 | 太 | 郎 |
| 五 | 圓 | 樺太敷香郡東一 | 蛭 | 子 | 省 | 一 | |

歌壇

與謝野晶子選

朝鮮武内竹美

一元と命名をして天皇の大聖業へ
と捧げまつらん

皇紀二千六百年一月元日次男出生紀

元二千六百年の元旦に嬉しくも目出
度くも生れた子は男兒であつた親の喜
びは一通りでない、一元と名づけて、
寵愛すると共に心ひそかにこの歴史上
記念すべきよきに生れた子を大君の
御役に立てさせんとする固い覺悟を持
つた親として日本人として愛の深い作
である。

三重縣 大野 歩 行

不動經よみて捧げて先づ思ふ御國
強かれ御民安かれ

現今の世相を見、世界の狀勢を見る毎
に作者は憂如として居られぬ氣持にな
る自分の信する不動經をよみ上げて國
家と民の上を祈念しつゝ激浪の中に針
路を見出さうとしてゐる心持が見受け
られる、よみて捧げてと語を強く重ね
強かれ安かれとくりまつかへして云ふ調子
がわだかみきまつてゐる。

徳島縣 丸岡 長 壽

寂しさを言はず黙して紙に書く吾
が此の頃の歌の拙し

自分の心には世と相入れぬ人と相慮め
がたき失意の深い嘆きがある、人に語
つてもすべないことだと歌にまぎらし

て紙の上で思ひをのべて見るが、それ
も屈托の大きい故かほんとうの心をう
まく云ひ現はせないとするせまい氣持
を歌つたもの。

東京 八木 美 根 子

春の雨今朝はつめたし沈丁花の蕾
葉ながらぬれつつ咲かむ

幼にして父を今又母を喪ふ

京都市 望月 久 次 郎

うつせみの大いなるかなしみに我
たへゆかむみ名をとなへて

北支那道 渡邊 明 道

忠勇の二字に答へんふるさとに待
ち給ふらむ母を偲びて

東京市 細田 初 枝

更生の意氣を白衣に包ませて片手
となりし兵は微笑む

神奈川縣 獨逸人 北 見 博 義

佛印よりよこせし兄の文よこれ汗
に書くらし指紋らしきもの

札幌市 野 尚 秀

時計臺の鐘の響きの悠るやかに流
るゝ街の雪の夜半かな

姫路市 山本 美 代 子

手料理のまづきも只に悦びてうま
しと夫のひたすらに取る

大阪市 高 橋 い し

かゝる世の男の子と生れし甲斐も
なく病に逝きし夫子ぞ悲し

北海道 花田 順 往

時ならぬまがきの雪と見るまでに
いまを盛りて咲ける卯の花

長野縣 丸山 力 園

戦況を朝のラヂオは告げ來り妻を
うながし稲刈にいず

小樽市 中 村 も ん

もやこもる港に朝の鐘のねのゆる
く流れて明けそめにけり

栃木縣 萬 壽 云 海

山脈の遠きに光りものの芽の萌え
出づる春や空霞つゝ

北海道 寺 田 順 山

我國は日の本なれば日の神の道を
世界に説きてひろめむ

福岡縣 古 川 喜 作

いづ國か地にほろふべしあはれ又
彗星の生るゝと蠟はなげく

茨城縣 伊 藤 は る

一人起き短歌よむ夜の静けさよ時
計の音のしるくなりつつ

京都市 竹内 は じ め

人の住む屋根に降りくるぼたん雪

やがてあきらめ融け落つるなり

愛名市 青木 玉 江

雪の夜やいくさの庭を偲びつゝ勿
體なやと母はこたつに

京都市 朝島 孝 治 郎

征く人のその心もて願ひこそ大和
島根の姿ならめや

大阪市 豊 女

現世に夫と呼びます人も無く明日
より我も尼の友人

神奈川縣 河上 隆 吉

大いなる乳牛横たはる田舎路をの
どけし汽車は今し過ぎゆく

阿南海 郡 山 人

藥局の戸をくより行けば我をみつ
嘲るらしき人の喧のあり

徳島縣 竹島 渡 波 爾

塔へがたき想念をもち暫くは行き
もなずみぬ九品寺門前

青森縣 丸 尾 傳 山

春の雪降りてかれ木に花さかせや
がてはきゆる浮世なりけり

小樽市 中 村 善 祐

雪の日や露天に立ちし地藏尊あら
もつたいなやと我はつづやく

小樽市 中 村 善 祐

投稿規定

はがきに一回二首以内とし
「淨土」編輯部歌壇係あて
に送ること。

通 筆 花 まつり



市民生活と

花まつり

三 木 清

毎年花祭の頃になると、私は少年時代のことを思ひ出すのである。四月八日の灌佛會には近くの寺へ甘茶を貰ひに行った。寺は小高い丘の上にあつて、私は平生もよくその庭で遊んだものである。灌佛會が近づくと、野にも山にも春がいつばい來たことが感じられ

る。その日には顔見知りの子供のたれかれがおおぜい集まつて樂しかつた、甘茶を貰ひに行くのはどこの家でも子供の仕事であつたのである。小さな柄杓で甘茶を汲んで、釋迦の像の頭上に灌ぎかけるのも樂しかつた。持つて歸つた甘茶を家族のものと一緒に飲むのも樂しかつた。あの妙に甘い味は子供の心にも釋迦降誕

の熱い國の春を思はせた。

私は今またドイツで経験した復活祭のことを思ひ出すのである。その頃になると、長い北國の冬も終つて、草木が一時に芽を出し、花を開く。この自然の突然の變化を経験したことがない者には復活祭の雰圍氣は理解されないであらう。その日には老人に至るまで連れ立つて戸外に出て、ドイツ人があのやうに好きな、また誇りにもしてゐる美しい森を散歩する。この散歩を除いて復活祭の氣分は理解されないであらう。

これらの思ひ出がいま私に花祭の意義について考へさせるのである。祭にとつて自然は大きな要素である。自然の變化のうちに祭が織り込まれてゐるといふことは好ましいことである。自然を忘れてゐた人間に自然を感じさせ、自然に背いてゐた人間を自然と和解させるところに、私は祭の一つの意義を見出したいと思ふ。その名のやうに花祭も自然を感じさせるといふ仕方では市民生活の中に入つてゆくのである。自然と人間との親和はすでに或る宗教的な感情を準備するであらう。

今日の市民生活において乏しくなつてゆくのは情操

生活である。その原因の一つは、生活が機械的になつて、人間と自然との有機的な關係が失はれるところにある。花祭に對して自然を感じしめねばならぬと希望するもの、これによつて市民生活に情操的なものが與へられると考へるからにほかならぬ。もちろん花祭は自然を對象とするものではない、自然は背景または雰圍氣に過ぎぬ。しかしながらこの背景は必要であつて、古い宗教的行事はこの雰圍氣を重んじ、いはばその中に解け込んでゐた。すべての宗教的行事は情操的要素について深く考へてきた。祭がとりわけ豊かに藝術的なものを含まねばならぬのも、これに依るのである。私は花祭に對してその名にふさはしく藝術的であることを希望したいと思ふ。市民生活に情操的な潤ひを與へるところに花祭の大きな意義がある。このやうな仕方では市民生活の中へ入つてゆき、おのづからそこに宗教的雰圍氣が醸し出されるといふことが望ましいのである。

祭が市民生活に對してもつてゐる最も大きな意義は協同生活の意識の昂揚である。自然と人間との親和もこの場合人間と人間との親和の機縁にほかならないで

あらう。元來宗教は人間の協同生活における最も重要な紐帯である。祭は協同生活の意識の表現であり、この表現を通じてその意識は更に強化される。花祭は佛教國日本の國民的協同生活の表現でなければならず、またそれに依つて我々の間に協同生活の感情が新たに甦り、強くされなければならぬ。このやうにして今



花祭の思ひ出

村田嘉久子

日、利益社會から協同社會への轉換が要求されてゐる場合、花祭の意義は特に深いであらう。人間と生れて佛法を聞く、これ大いなる仕合せである。かかる有縁の衆生が相共にこの國土に生きる、これより大いなる悦びはない。花祭はこの悦びの表現でなければならぬ。

の時の事が懐かしく思ひ出されます。

私は四月十六日の誕生で、よく母がもう八日早く生れて来れば捌口なよい人間になれたんだのに……とよく笑ひながら申します。

勿體ない事ですが釋尊と同じ日に生れて居たらそれ

四月の花祭りの頃に
なると子供

こそ大した人間になつたかも知れませんが、果報まけがしてかへつて生命が無かつたかも知れないといつても母と申して居りますが、兎に角自分の生れた月といふ物はなんとなくよい月に思へるものです。私は四月の前になるといつも床の間には『出山の釋迦』の軸を掛け八日だけでなく四月中をお祭りすると共に又自分の無事を合せて祈ります。

長い間山の中で行をされたお釋迦様の立身のお姿の

軸は、神々しいまでに我々人間の胸を打ちます。私はいつも恐いやうなそれで居て又懐しいやうな氣持で眺めて居ります。それは私の母が私をお腹に持った時から今まで何んともなかつた眼を病み出して、丁度私が生れた頃には随分母は眼で苦しんで居たやうでしたから、私も兄弟、又は弟妹大勢居る中でタツタ一人眼の性が悪く子供の時から眼科へ通はされ通してした。

『お前は罪の深い子だよ』と母がこれもよく口癖に申します事で、そんな譯からか毎年四月の花祭りになると乳母の手に引かれるか又は店の小僧に供されては私の生れた土地品川の法禪寺といふお寺の寺内にあるお釋迦様を拜みに行き甘茶を頂いて來ては悪い眼を洗はせられて居りました。その時分には甘茶といふのは甘いおいしいお茶だとばかり子供心に思つて居りましたからそれで眼を洗ふとどうしてよいのかがよく解りませんでした。只お詣りしてあの小さなお姿におつむりから甘茶を掛けて上げるのが子供の時分只面白く嬉しかつたものでした。

天地を指さしていられるのも何やら解らずよく母にそれを聞きますと『天上天下唯我獨尊』と節をつけて

歌のやうに笑ひながら、母は申します。そしてそれきりこれ亦くわしい事は聞かしてくれませんでしたから、何の事やら解らず、大人になつて段々それが解り甘茶で眼を洗ふのも眼科のお醫者様にお茶は眼によいといふ事も伺ひ、矢張り親はありがたいものだ、今更のやうにしみる、感じた事でございます。

只今では仕事の都合で旅などしたりして居て、其日に定つてお詣りに行けない事もありますが、又甘茶も頂いて來られない時もあります。『出山の釋迦』の軸だけは床の間に四月中掛けてお祭りして居ります。

七 あゆみ

金田 明進

昔も昔三千年、花さきにほふ春四月、
ひびき渡つた一こゑは天にも地にもわれひとり

お花まつりの歌をうたつてよこんだ幼い頃が思ひ

かへされて、懐しい聖誕の春が訪れました。あの昔ながらの誕生佛のお姿に今の私たちは、どんなに力強いみ教を受けることでせう。

にこやかなお生れになつたばかりのお釋迦さまが、裸のまゝで天地を指して起られたお姿の尊が感じられます。

素つ裸で大地に立ち上るんだ！

生れたときは何一つ持つて來たのではない、のです。財をたより、學をほこり、名にとらはれ、裸になりきれない私たちに、お釋迦さまは、其の身につけた執着の衣をぬげと教へ給ふのです。

昨日までの過ぎしかげをよくよと考へたり、明日からのまだ來ぬ幻を追ひ求めて、今日の脚下を忘れ勝ちの私たちに、お釋迦さまは脚下の大地に立ち上れと教へ給ふのです。

義理もいらぬ、體裁もいらぬ、粉飾のない簡素の中の美さ、簡素の中の力強さを、あの御誕生のお姿に拜みとることが出來ませう。

足が大地にしつかとついてゐなくてははいけない。迷ひの衣を身につけてはいけない。起ち上れ大地に。し

かも赤裸々の姿で。そこに更生の一路が見出される。難局打開の力が生み出される。煩悶の黒雲が一掃される。有難いことです。

七歩のあゆみ

七歩あるいたお釋迦さま、さうです。お釋迦さまはたしかに七歩を教へられた尊いお方でした。六歩までは迷ひの歩みです。六歩をふみこえて、第七歩を印されたところにお釋迦さまの尊いお姿が拜まれます。

第一歩は、いやいや働く世界です。仕方なしに骨の折れる仕事をすする世界です。儲けのために、衣食のために、止むを得ず働く勞働の世界です。これを地獄と申します。

第二歩は足ることを知らぬ人たちの世界です。いくら有つても、その上欲しい欲しいと貪る者の世界です。他人のためとか、お國のためとかは、少しも考へられない人たちの世界です。これを餓鬼とは申します。

第三歩はなまけもの、世界です。目的のない、無氣力の人たちがよつて食を求めて歩き廻つたり。働いても牛馬のやうに何のために働くかわからない。なるべ

くなれば何もせず、日向ぼっこして、のんびり寝て居たいと云つたやうな人たちです。これを畜生の世界と申します。

第四步は争ひ合ふ世界です。自分を立てるために一寸したことに腹を立て、互ひに譲り合ふことなく、けんくわし合ふこと絶え間ない世界です。これを修羅の世界と申します。

第五歩は、慾望にとらはれた誤れる人間の世界を云ひます。物を欲しがる、享樂を貪る、名利を求める、みんな迷ひの人の世のこと、これを人界と申します。第六歩は、樂をしてぶらぶらしてゐる世界です。財産



があるから、名門だから、といふ特別な力をたのみと

自分は勞せずとも生活出来るといふので、美味しいものをたべ、美しい衣を着て、立派な家に住み、遊樂を事として、贅澤に過すもの、これを天上の世界と申します。働かずして遊び食ふもの、これは乞食生活に等しいと云はれます。

以上の地獄、餓鬼、畜生、修羅、人界、天上の六つの迷ひの世界を歩き廻ることを六道輪廻と云ひますが、お互はこの間違つた生活を常に繰りかへしてゐるのではないでせうか。

お釋迦さまはこの六道をふみ超えて、第七の大道を歩くと佛の世界を示されたのであります。それはめざめて生きゆく世界であります。私を中心とした、わがまゝな六道を踏み超えて、第七の滅私奉公の佛界に住することをお教へ下さつたのです。

めざめ働け！ よろこび働け！ そこに極樂あり、淨土ありと示されたのです、職域に奉公するところ、無我的大道ありと示されたのであります。

お誕生に七歩あゆまれたお釋迦さまは、その慕はしい懐しいお姿の中に、かくも尊い説法を興へられるのです。

われひとり

七歩みしてから、「天上天下唯我獨尊」とお呼びになつたと申されます。

「天にも地にもわれひとり尊し」と云ふと大へんお威張りになつたやうに聞えますが、けつして、さうではないのです。それは「このわがまゝを捨てゝ、ほんたうに滅私奉公の尊い力を出すものは、誰れでもない、この自分である」といふ自らのめざめの叫びです。天地の大恩力も、この私を通してこそ靈妙のはたらきを表はし得るのです。私がやらなくても誰れかやるだらう、といふ無自覺の中には獨尊の精神はわかりません。誰れかやるだらうと逃げをうつ者は、また「俺でなければ……」と威張る者です。「この私がやらせて頂かなくってはならぬのだ」と自覺するところに、奉公の大精神は現はれ、天上天下唯我獨尊の大精神を體現することが出来ると存じます。

花まつり

鐘なりめぐれ、

やれ、めぐれ

お寺の庭に

花がふる

白い蓮華の

花がふる……

四月八日、今日こそ、うるはしい、花さきみだれたルンビニの園に、世尊降誕のよろこびの光りを仰いだのです。ことしも、全国のお寺といふお寺のお庭に、さくら、れんげの花あふる春に、お花御堂のお釋迦さまを圍んで、どんなに澤山の子供たちが、また、どんなに大勢の人々が、微笑をうかべて、甘露をそぐこととでせう。

私なき歩みは、今日わが日本の踏まねばならぬ大道のあゆみです。

私なき進みは、今日、世界の各國が希ふべきところとです。

大政翼賛は、私心なきところに成就されます。大東亞共榮圈の確立も、私心なき無侵略無賠償の大慈悲によつて完うされます。

この意味で、お釋迦さまの御誕生が、今日いかに我

らに大いなる光とよろこびを興へることせう。甘露の雨が降りそぐではありませんか。よろこびの法の華がふり来るを感じるではありませんか。



冷たい雨の後

花祭と隣組

生田花世

心をこめて、私たちは、老ひたる人と共に、幼き者と共に、お花まつりを、お祝ひしたいと存じます。

には暖かい日が二三日續いて又雨となる。大陸ほどそのけじめは劇しくないとしても日本も三寒四温とやらくり返して、陽春はもう近くなつて來てゐる。

あの美しい、うらかな四月の事を考へると、すぐに、私たちの心には「花祭」のことが思はれる。日比谷、其他で、毎年行はれる花祭の行事、私は東京の花祭をまだ一度も見えた事がない。

私の心に来てゐることは日比谷の花祭は、ふだん、

佛教の會に加入してゐるもののみの行事で、又、さうした關係の人でなくては行つても加はりにくい事情があるらしく考へられる。私のやうな感じを抱いて、長く、新聞だけで、日比谷の「花祭」をおぼえて來てゐる人も相當多いであらう。この第三者の氣持を、花祭行事開催者に反映しておくのもムダではないであらう。

○

なつかしいのは、ふるさとの「花祭」である。その日は重箱に御馳走をこしらへて、右隣左隣、前の家、後の家、さそひ合はして、お寺へゆく。お寺の、ながめのよい庫裡の廣間に、いつしか、何十人といふ女子

供、老人若者が居並ぶ。そして、御住職のお話をきいてから、持つて来た重箱をひらき、それぞれおかつを交換しあつて、笑ひ聲をたゞよはしながらたべるのであつた。食事がすむと、男の子も、女の子もあそぶ。男の子はうしろの山から藤の蔓をとつて来て、七八人がゝりで、ひつぱり、女の子をその中に入れようとする。女の子は、キャツキャツとさわいで逃げる。かうした遊びのうちに、甘茶をもらひ、嬉々として、村の道をわが家へとかへるのであつた。

二月十二日、私は、品川区役所の主催で、東京隣組強化運動の品川隣組の會が、大井小學校の講堂で、行はれたのに、講演をたのまれて、六百人の區の人々にあつた時ばかりしも、ふるさとの花祭の日のお寺の庫裡の廣間を思ひ出したのであつた。戸主が居り、老婆が居り、嫁が居り、娘が居り、子供が居る。一軒から一人づつ誰かが出てゐるので、さうした顔ぶれであり、ちがつてゐるのは、重箱を持つてゐないだけの事であつた。又、佛話をきかない事であつた。甘茶をもらへない事であつた。その代りにはこの隣組の會には、ニュース映画が見られた。

私は、その時、隣組の會が、親睦をますのを主にするやうな目的の時には、村の花祭のやうに、重箱、辨當箱をそれぞれ持つて来て、晝食をとみにして、話をきい、映画を見、子供たちを遊ばすといふやうな仕組で開催される事が、効果が多からうと考へられた。それと同時に、花祭を開催する主催者側が東京の、又、日本の、目下の大計畫であるところの隣組愛強化運動に翼賛の實を佛教側からあげるといふ公的目標をもつて、少しく、從來の、花祭舉行形式を改めたらばどうかと考へられる。

折角集つた大衆に、隣組の事の話をするのは、勿論、いい事だし、隣組強化の目的の映画、又、ニュース映画を見るのもよからうし、それぞれ、本の一冊、菓子の一袋を、み佛にさしあげるつもりとして持つて来て、幹部が、それをまとめて、み佛に供へるとともに戦地への慰問とするといふやうな計畫も銃後花祭として、新しい、いいプランではないであらうか。今日、各方面の日本人生活は、考へ方を新しく發展せしめての、いろいろの行事の出發である。佛教方面の指導者の考察と實行とが、新生面を開く事を私は熱望する。



今治市 三木光子

箱植多の野菜あれこれ日脚伸ぶ

評 二階の屋根にでも置いてあるのであらう、そして芽が出たとしても間もないことであらう「日脚伸ぶ」が其れを物語つてをり「あれこれ」が利いてゐる。

島根縣 大村 轉石

法恩講はてゝ風ある障子かな

評 緊張してゐたのから開放されて、ほつとした氣持がよく出てゐる。

京都市 津秋頭 世子

頬杖のストープ時計ゆるやかに

評 温まつて、のんびりしてゐる状態が窺はれる。

栃木縣 大 輪 清

橋高み春謎の目に射りぬ

山梨縣 程 原 一 幸

疊替へ神と呼ばれて還る子に

京都市 竹内 はじめ

縫初や今宵は水も凍るまじ

滋賀縣 安藤 正生

春雨に音ぬれてをり機を織る

長崎縣 菅 ちかひ

神戸市 古賀長善

風すさび小雪さへ見せ淡路島

島根縣 石見 千翠

襟巻を頭にかぶり風邪和尚

京都市 鈴木 白舟

別れゆくこの町の二月風かたし

三重縣 大野 歩行

不動經祈りてあれば月おぼろ

静岡縣 水野 法子

春來しも心さびしく切手貼る

大分縣 藤 正喜

故き人の數の淋しき歸省かな

小樽市 中村 もん

山襲に斑雪残して春きたる

川崎市 深瀬 興吉

春の山見渡すかぎり緑かな

島根縣 西往 一ほり

雪ちら／＼シグナル青く光りある

大阪市 田中 秋芳

氷雨降りし山門にして梅咲けり

新嘉州 北出 皓月

雪解の山膚ひらき新しく

徳島縣 丸岡 長壽

麥畑の麥ようやくに緑さし

神奈川縣 北見 博義

晝替の屑を焚くなる椿かな

群馬縣 北條 祥雲

梅咲いてより石切りの長閑なる

福島縣 古川 彦作

みたらしのあふれてあたり梅の花

東京市 渡部 一念

寒鳥夕燒雲を追うて行く

香川縣 日向 法圓

暖をする人多し御忌の寺

名古屋 屈場 典雄

寺へ行く一筋道の深雪かな

廣島市 山口 勇治

溜池の畔には龜の日向ほこ

廣島縣 藤 暢彦

南無この梅一輪のほひとも

高知縣 横山 亮圓

鐵着て首筋寒し春の風

和歌山市 南 小梅

避くる方へ煙追ひ來したき火かな

滋賀縣 重野 ふみ子

國の子はどこを歩むや今朝の雪

栃木縣 萬壽 云海

舟漕ぐや身近の千鳥啼き渡る

東京市 浅井 まさ子

春の雨静けき夜半を汽車は行く

神奈川縣 河上 隆吉

夕映を正面に受けし椿かな

北海道 花田 順往

獨尊の聲あらたなり誕生賀

川崎市 深瀬 益吉

古池の面の風の輝ける

京都市 福島 孝治郎

池の水湛々として枯尾花

姫路市 山本 一音

遠ざかる團扇太鼓や寒の雨

投稿規定

官製はがきに一回二句以内とし「淨土」編輯部併係あてに送ること

淨き友 信仰坐談會

一日時 四月十三日(第二日曜) 四月廿七日(第四日曜)

午後六時半より

一場所 本郷區東片町七八

橋本榮榮方

一議題 選擇本願念佛集講義

講師 中村辨康先生

淨き友の會幹事

寺院
巡り 大檀林鎌倉

光明寺参拜の記

轉法輪行念

(一)

鎌倉と言ふ音調は不思議な音感を持つて居る。鎌倉時代に依つて偲ばるゝ數々のこと現代の鎌倉の空氣が誘ふ情趣の様々な色調、是等が一つになつて、史家もスポーツマンも詩人をも引き寄せる。懐古と清新を含む鎌倉は又「いざ鎌倉」の發祥地である。そして時はいま、いざ鎌倉の非常時である。鎌倉へ來り、鎌倉精神を味ふのも時代精神把握の一方方法であると言へやう。

鎌倉を訪れた人は、必ず材木座に足を運び、

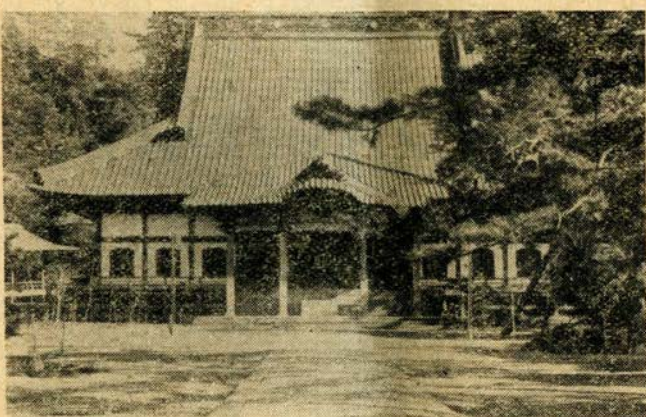
光明寺山頭に立つて、由比濱を見下すべきである。まざく／＼と眼下に見渡す海邊一帯は現代人の、國際色をも加へた情景で、其れは凡そ明朗と健康とを代表する最先端風景である。然も、一度目を閉ぢて史眼を開けば、彼方稲村崎から、勅皇の旗を押し立てた新田義貞の、あの華麗な武者姿が由比濱へ躍り込んで來るし、此方の由比濱では、生粋の鎌倉男兒、青年相模太郎時宗が、鎌倉名産正宗作の日本刀を振り上げて、怒髪天をついて、元の使者を兩斷にせんとしてゐる。然も再び肉眼を開いて見る現實は、太平洋の波が巖頭に荒れて

居る。思はず、弘安・建武の昔を今にして非常時感に「相模太郎の體瓶の如し」と力みたくなる。其處で、固くなつた足をゆるめやうと一步踏み換へて、足許を見ると、淺春に青々とした少女の様な自然生の大根を見つけることが出来る。此れは此處の光明寺のあたりから小坪の海岸一帯に、今は自然に生へる記主大根と稱するもので、此れに交つて記主菜と言ふものも見出せる。七百年前の國難を乗り切つたあの國力の源泉の一つは鎌倉時代の質素生活に依る生活力の鍛錬にあつた。光明寺の開山記主禪師は、一つには一山僧衆の簡素な自給生活の爲めに、二つには地方漁民達の蔬菜自給の爲めに、自ら弟子達と共に由比濱の砂地に大根及び波多菜を種植したものが、今日見る自然生の記主大根と記主菜の由來である。今日の國策的生活の指針を、此の野菜に見る様であり、煎ずれば風邪に藥效もあると言はるゝが、現代人の生活精神の上にも效き目ある如く思へるのもまた床しい。

記主菜に導かれて、光明寺を拜すれば、此

れはまた静々、掃き淨められた松林の間を縫ふて、總門、山門、大殿がつゞき、背後天照山が蒼々とそびえて居る。凡そ、日本精神的である。華麗とか艶美を思はず何物もなく、鎌倉的な、簡素と壮大と閑寂だけである。門標に關東總本山とあり、淨土宗東國の巨刹は如何にも寛々たる相狀を示して居る。總門は二百年近くの古さかと思へるが潮風に堪え寂びて、老松とよき階調をなし、特に山門の雄大さとの對比も極めて良い。山門は、恐らく關東から東北を通じて最大のものと思へる。「天照山」と書かれた、後花園天皇の御宸筆の額が唯一つ輝くのみで何等の彩色のないのも好ましく、三百年餘りと考へられる時代を古びた姿は、あたりの青松を腰帶して、天照山岳を背後に總門の前に控えた様子は、廣々とした境内と相まつて、全景觀の重心をなして居る。建築の壯大性は、近寄つて見上げた時の、今にも自分の上に倒れ來さうな切迫感と、離れて見た時の充分な安定性を感じしめる堂々感との二つから成り立つべきものである。

國屈指の大建築物で、背面の天照山に極めて近接して立てられて居るにもかゝらず、山



るが、此の山門は確かに此れを見へて居る。光明寺へ参拜して、建築として見るべきものは山門の外に大殿と鐘樓がある。大殿も東

容に厚せられずに奥深い感じを示して居るのは、大きなこともさりながら、結構を考へた人の非凡の才能も感歎に値ひする。鐘樓は嘗てアメリカへ藝術出品されんとした程の名建築である。然し此處に釣された鐘の銘を讀むと、此れは元來光明寺の鐘ではなかつたのである。今の鎌倉法泉寺谷にかつてあつた竹園山法泉寺の鐘で、元徳二年、今から六百二十年前に、建長寺首座素安禪師の作られたもので、工匠金山清拙の鑄たもの、大工は山城權守物部道光であつた。此れがその後光明寺へひき取られたものである。従つて鐘は鎌倉時代の代表作品である。鐘樓はどうしても當時のものとは考へられず、近世のものと思へるが、當時の形を相傳へて來たものか、全國まれに見る整つた名建築である。尚ほ此の鐘樓の土臺の石垣は、内部に青銅のクサビで止め合せてあること、建築的に有名であり、あの關東の大震災にあつても一部分のすき間も生じなかつたのである。芝の増上寺の鐘樓も此の手法を真似て造られてあつたが、此れも鐘樓

の焼けてない今日でも、石垣だけは嚴として崩れて居ない。

(III)

總門を入つて右手の松原に塚があり、上に善導大師の銅像がある。名匠の作と思へる作品であるが、此れはいま本堂にある善導大師木像の身代り像であり、此の、餘り人に氣付かない塚こそ、善導塚と言はるゝものである。光明寺が此處に出来た由來を語るものもあり、淨土宗信仰史上の記念塔でゝもあり。

光明寺開山記主禪師は、淨土宗第二祖聖光上人の弟子で、淨土宗の第三祖上人である。聖光上人が九州筑後善導寺で、淨土宗を弘めて御出の時に、その念佛信仰の正しさを證明する爲に支那から善導大師木像が、僧となつて渡來された。此の僧が船中で嵐を鎮める爲めに書き給ふたのが善導寺の有名な船板名號である。此の僧は船から上ると共にまた木像となり、聖光上人が供奉されて居たが、次い

で聖光上人から記主禪師へ授けられ、記主禪師は此れを受けて九州を出で關東に向はんとせられたのである。然し竹後千歳川河口まで來ると、突如として、經を讀みつゝ此の木像を河から海へ流し込まれたのである。随分無法な行ひの様であるが、記主禪師には眞劍であつた。經を讀みつゝ祈願して、「何處でも有缘の地へ流れ付いて戴きたい。必ず其處を探して行つて私は法を弘めたい」と木像に誓つたのである。即ち、最も眞劍な方法で、此の生ける善導大師像に先導を願つたのである。武士で言へば背水の陣であり、信仰生活の最高潮にあるものゝさし迫つた仕業であるし、此の話と光明寺開山堂の記主禪師木像とを併せて拜禮三思すると、禪師の何物をも突き通して進む信仰生活態度が、現前に躍如として來る。其の後、記主禪師は法を弘めつゝ鎌倉住吉谷悟眞寺に入り、次いで北條經時が佐介谷に蓮華寺を建て、此處で説法して居たのである。今ま、佐介谷にある光明寺昌の所であるが、丁度其の時に由比濱に七日七夜光明が

輝き、漁人と共に、筑後で流し入れた善導大師像を發見したのである。感激悲泣したその喜びは如何なるものであつたかは、想像に餘りがある。その發見された所が今の善導塚で、やがて蓮華寺が此處に移され、ついで北條經時が夢に靈告を受けて、天照山蓮華院光明寺と名づけたのである。記主禪師は、後嵯峨上皇、後深草天皇の戒師を奉仕した人、香衣上人號を受け、後宇多天皇から下された勅監記主禪師の勅額は今も開山堂にかゝげられてある。

(II)

大殿に参拜すると本尊阿彌陀如來は、非常に端麗で而も壯嚴である。運慶の作で、運慶が没後その骨が入つて居ると傳へられるが、拜した感じは運慶よりも快慶風に近く思へる。いづれにして鎌倉時代佛像中の逸品である。また、本堂に、善導塚へ流れつき給ふた例の善導大師木像があり、衣は金泥で阿彌陀經が書かれてあつたと言はれ、貞享年間には

生の字が一字だけ讀めたと記録されるが今一見した所では一字も見出せない。以前は祈禱堂にあつて、不斷念佛の本尊であつたが、震災後此の大殿に移されたものと考へる。傳記に従へば善導大師自作像である。古い木像ではあるし、彫刻として、も立派なものであるし、其れよりも淨土念佛信仰史上及び光明寺史として重要な意味ある木像であるから参拜者は必ず拜することを忘るべきではない。此の木像の近くに江之島辨天像が祀られてある。一寸異様な風景であるが、これには江之島から三度光明寺へ流れつき、三度目から神意に依つて光明寺に留まられたと言はるゝ古事來



師の勅額を前にして、自作と言はるゝ等身大の開山上人木像がある。恐らくは自作でな

歴がある。三尺餘りの大きな木造の坐像、極彩色の靈感を感じしめる神像である。

本堂を出で、開山堂に行けば、勅諭記主禪

く、何人か名工の作であると考へられ、星霜六百五十年を経た今日尚ほ、生ける如き活眼から、嘗て善導大師の靈像を海へ投ぜられた風骨が射る様に感ぜられ、見るものをして思はず身を正さしめる感がある。記主禪師は彫刻に秀でられたことは事實で、四十八體の阿彌陀佛像を刻まれて諸寺へ下されたのが、記主佛と稱する佛像で、關東の處々の寺院にある管である。光明寺佛殿にあるいくつかの佛像にも記主佛は存する管であるが、記主佛の最逸品は東京マハナ學園本尊である。此れは同學園創立に當つて、光明寺から特旨に依つて園主長谷川氏を通じて下され、勸請して本尊とされたものである。尤も、此の佛像は、記主禪師の念持佛だつた運慶作と傳説する阿彌陀佛とも考へられるが、いづれにしても、相好、傳説、出所共に、宗教々育を中心とする學園本尊に申分なきもの、機會ある人は一度拜禮すると良い。

光明寺を天照山と稱するのは、背後の山がかく名づけられるからである。天照山は天照大神を御祀りする山であつて、神體は一寸の木像であり、八幡宮祭神なる應神天皇御作と傳へる神品である。北條經時が夢に靈告を受け、山頭の光明に依つて此の神像の祀られてあるを知り、寺を天照山光明寺と名づけたので、光明寺の光明は天照大神の神光明で、寺名は天照大神を祀る寺の謂である。他に例のない寺寶であるし、古來、天碑を祀つて護國祈願をこゝとした所以でもある。光明寺が鎌倉八幡宮と近世迄深い關係にあり、年頭には神官の参拜があつたと傳へるのも、此の神像との關係と思へるが、記録の明確なものが失はれ、傳説のみとなつて居るのは残念である。

(四)

本堂前に七百年を経た開山御手植の横柏、ほど同じ樹齡を思はせる横木も我々に取つてその昔を偲はせるもの、本堂左手の所に井戸があつたのであるが、今は假の建物の下にな

つて居るらしく見えない。此の水は、記主禪師が杖で地を突いて出され、寫經の水とされたと傳へらるゝもの、記主水と呼ばれ、鎌倉



名水の一つであつて、四時清冽で、地方民の眼病の時の洗水ともなり、又た地方農民の雨

請ひをする時の祭水として靈驗ある水であつたが、震災で枯れたのかも知れない。枯れたとすれば残念であるが、何とか形だけでも保存したいものである。

本堂の南は内藤帯刀忠興一家の菩提所、靈屋には定朝作の阿彌陀佛、如意輪觀音がある。此處から天照山頭に登ると記主禪師の墓があり、代々の住職の墓もある。場所は相模灣を一望に見渡し、眼下に材木座から由比濱一帯の白砂青松、靈仙ヶ崎をはるかに眺めて、印度靈鷲山をも偲び得る。絶景の中の此の墓地で一寸心して見るべきは三十六代目以下約五基が龍宮石と呼ばれ、龍宮から來たと言はれる珍しい石で作られて居ることである。龍宮石の傳説は三十六代の觀徹上人に關するものである。

上人は毎日龍宮王の歸依に預つて、龍宮で中食を受けられた。或日小僧が龍宮行きの野心を起して、上人の高座にもぐつて居ると、上人は高座のまゝに、海水の中に入り龍王に食を受けられ、小僧も龍王に發見されて供養

を受けて歸ることを得た。其の間は相當長時間の間、横であつたが、實際は今日の時間で約十分程しか経過して居なかつたと言はれる。

光明寺の寶物は可成多く一寸簡單に述べ難いので他日に譲りたいが、此の寺には硯が多い。菅丞相の硯、賴朝夫人政子の硯、平重衡が法然上人に獻じた有名な松影の硯等である。又た一寸世間に知られてないもので大きなものに、弘法大師が佐野の砂場で書いたと傳へる、長サ九間、幅二間半の六字名號がある。此の外に、南岳大師の袈裟や其の他の有名な國寶も数多いが、今年は開山記主禪師の六百五十年の御法事がある。いづれ此の時に展覧もあることと思はれるから、其の機會に又た拜觀記でも書きたい。

松嶺に送られ山門を出ると、例の善導塚の背後に、昔の僧寮であつた蓮乘院がある。此處の本尊は蓮慶作と傳へるが、誠に得難い尊像で、尊嚴な意味からも、亦た鎌倉時代の古美術としても珍重すべきである。今から、五百七十二年、貞治二年三月十五日に修復し

た書付が胎内にあるのであるから、凡そ眞價の程も察せられるもの、千葉一族の常陸の守本尊と傳へられる。

終りに有名な光明寺十夜を見て、此の稿を終りたい。往年は十月六日から十日間、最近は十一日から十五日迄修せられる十夜法要は、文字通り、鎌倉から三浦半島へかけての民族祭典的行事である。光明寺は徳川時代關東第一の勢力を持ち、一向宗徒を強制的に壇徒にした程のことであつたと記録されるが、その盛威を今に偲はせる唯一のものが此の十夜である。今日でも、四日間夜を徹して老若男女が集ひ、一年を通じて練習した念佛講中が四方から繰出される。境内はサーカス、劍戟芝居、其の他の見世物で一杯になり、材木座一帶は緣日夜店がつぎ、鎌倉驛と逗子驛からは間斷なくバスが人を運び、材木座の町の入口から本堂迄、終夜人で埋められて人波に押されて行く以外には、歩けなくなる。雨が降ると否とで、地方民一年の繁榮に狂ひが生ずると言はれるもので、商人にも一般人に

も、一年間を待ちつゞけさす行事である。山門兩袖の念佛講の打ち續ける鐘、本堂の讀經の聲、サーカスの音、子供の風船玉の破裂、此の騒音と混雜は明應四年以來約四百五十年の歴史を持つて居る。

光明寺十夜は特に勸修十夜と言はれる。明應四年に、中興の祐崇上人が召されて禁裡に入り彌陀經を講じて御感を得、つゞいて衆僧を率ひて聲明念佛と阿彌陀經の誦誦をなし、勸願所の繪旨を受け、此の儀式を永世に光明寺で行ふことを勸許されたのである。此れが又た淨土宗に十夜念佛ある始まりとも言はれる。相模一圓の末寺の總動員で、近來は十二日午後から十五日早朝迄行はれ此の間は參拜者も大殿へ洩り込むし、僧俗共に文字通り不眠不休の法樂が續けられる。緣日的大行事の少ない鎌倉では、唯一最大のものである。各種各様の人士の住むと言はるゝ所謂鎌倉人の、すべての階層のものが、夏のカーニバル祭を終ると、一樣に待遠しくなるのが、此の光明寺の、通稱「お十夜」である。



先 師 を 語 る : 2

道 重 信 教 上 人

増 谷 文 雄

道重信教上人は、増上寺の法主になられるすし前、六十六歳にして、富士登山をなされたことがあります。

私は、その話を何かの本で讀んだとき、別に甚だ意外だとは思ひませんでした。むしろ、私の心の中には、さもありなんと肯くものがあつたのでした。

道重上人が増上寺にお出になつてからは、私たち、時折上人の警咳に接することが出来ました。その印象を、敢へて申述べてみるならば、この上人は決して、單なる酒脱、飄逸をもつて盡しうる人物ではなかつたやうに思はれます。

酒脱と飄逸とは、單なるうはべの事にすぎなくて、その奥底に

は、嚴として存する信念と、思ひもかけぬ鋭い性格があつたのではないかと思はれます。それなくしては、あの有名ななし、法主の身をもつて敢へて飛行機にのつたことも、本當には理解しがたいし、さう思つてみると、六十六歳の老軀をもつて、富士登山をなされたことも、甚だ意外ではありません。

むろん、その時にも、

「その御老體では……」

と止めるものもありました。だが、思ひたつたら、止める方ではなかつたのです。

「寝疲のかりの縁のつきる時には、疊の上にをつても死ぬるものぢや。縁がつきねば、また下りて來ますぢや、もしもお山で死んだら東海道の上下りの汽車の窓から、富士山はわしの墓ぢ

や、見て通つて下されよ。」
さう言つて、つひに富士登山
を敢行して、恙なく下山するこ
とを得たのでした。

二

道重上人の書は、決してお上
手の方ではなかつたと思ひま
す。しかも、その書は、ひろく
愛重されかつ、随分と行き渡つ
てゐるやうに思はれます。

私の父もまた、上人の書を何枚
か蓄へてゐる筈ですが、それらの
書を父が上人にお願ひした時のこ
とを、私は、いまでも明らかに記
憶してをります。

「今日は、増上寺に行つて、道
重さんの揮毫を二三枚お願ひし
てきた。」

さう言つてゐた父が、それから
数日後、増上寺から持ち歸つてき



た上人の書は、なんと半折十二枚ほ
どでありました。

「澤山書いていただいた。」

父は大喜びで、その中の幾枚かを
私にも分けて下さつたのを、私はま
だ表装もせずに蓄へてをります。

ところで後になつて知つたこと
ですが上人の揮毫に就いては、つ
ぎのやうな逸話があるのです。そ
れを聞いて私は、上人の書の本當
の値打ちが初めてわかつたやうな
氣持ちがしました。

増上寺では、法主の揮毫に對する
御染筆料は、寺の收入の主要な項目の一つで
あると聞いてをります。しかるに、道重上人
が法主になられてからは、御染筆料のいかに
拘らず、どん／＼誰にでも書いてやる。二
枚といへば二枚書いて下さる。二枚といへば
五枚書いて下さる、私の父の場合のやうに、
二三枚とお願ひして十二枚も頂戴することも
ある。これでは、御染筆料の方の額は、まる

で棄なしではありません。

それに、われ／＼常人の考へを以てすると、あまり書きすぎることは、値打ちにかゝるはるやうな気がする。權威が落ちるやうに思へるのです。そこで、ある時、お傍のものが、

「あまりお書きになつては御揮毫の値打ちが下りますから……」と申上げたことがあります。それに對して、

上人は、靜かに教へて、

「いや、さうではない。僧侶が文字を

書くのは、他の人の揮毫とは違つ

て、結縁のために書くのぢや。名

號を書いて與へ、或は聖句を書い

て與へると、貰つた者は、それで佛

縁を結ぶことが出来るであらう。

だから、わしは一枚でも多く書いて

やりたいと願つてゐる。決して

書を惜んではなりませんぞ。」

と諭されたのでした。申上げ

た方も、それで初めて上人のお

心が解つたことと思はれます。

三



道重上人が、法主の身をもつて、敢へて飛行機に乗られた話は道重上人の名を知るほどのものが、誰でも知つてゐるほど有名な話であります。その壯舉の精神は、やはり揮毫の精神と、一脈相通するものがあつたやうに思はれます。

その話の轉末はつぎのごとくでした。

大正十四年の九月一日は、關東大震災の三周忌に當つてゐたので、道重上人は飛行機にのつて東京及び横濱の上空を飛んで、空中から散華供養をしようと思ひ立つたのです。だが、まだ今日のやうに航空思想の充分發達してゐない時分のことであつたので、増上寺一山をあげて、はげしい反對がおこつたのでした。

「この老體の法主を飛行機にのせて、

若しものがあつては……」

反對の人々は、みな法主の身を氣づか

つてのことではありました。だが、この

法主は、一度思ひ立つたら、途中でやめ

るやうな方ではありません。第一、僧侶た

るものが、供養のために生命を惜しむと

いふことが、この上人の譲歩し得ざると

ころであつたと思はれます。

「わしは一人の念佛僧として、是非ともこのことを斷行せねばならぬ。」

上人はさう言つて、堅い決心のほどを示されました。そして、八月三十一日の夕刻、寺中の人目をしのんで増上寺をぬけ出で、先づ鶴見の總持寺に參られました。

總持寺には、かねての知己の新井石禪々師がをられます。新井禪師は上人の招請によつて増上寺に講義に參られたこともあります。上人はまた、禪師の請によつて、總持寺に話に參られたこともありました。宗旨を異にする兩本山の主が講義の交換をなされてゐたことは餘程兩者の肝膽相照らしてゐたことと思はれます。そこで上人は、かねて用意の十五萬枚の散華を、總持寺の放光堂の佛前に供へて、新井石禪々師とともに讀經をなし、その夜は總持寺にお泊りになりました。

明くれば九月一日、一天晴れ渡つて、見事な飛行日和でありました。道重上人は、新井禪師などと共に、鶴見の瀧田飛行場に自動車を驅り、やがてニューポール機に乗り、片岡飛行士の操縦に



よつて、約一時間のあひだ、東京及び横濱の上空を飛行しました。

その間、上人は、始終「南無阿彌陀佛」を唱へながら、心をこめて空中散華を行はれたのであります。その散華には、つぎのやうに記されてあります。

茲に謹みて追悼飛行を行つて、法雲靈鷲くところ、珍妙華を雨ふらし、精靈の追善に擬し、以て幽魂の冥福を薦め、聊か遺族諸氏の心を慰めんと欲す、冀くは相俱に佛名を稱し、追悼の誠意を致さんことを

南無阿彌陀佛
南無釋迦牟尼佛
道重信教
新井石禪

この空中散華のことは、國內の新聞紙上で大きく報道せられた許りでなく、興味はさらに興味をあふつて、外國の新聞までが、上人のことを「飛行僧正」と呼んで書きたてたので、道重信教上人の名は世界に知られるに至りました。

その頃丁度、日ソ親善飛行のことがありましたが、ソ聯の飛行士たちは、東京に飛來すると早速、増上寺に「飛行僧正」を訪れて上人に敬意を表したといふこともあつたことでした。

以上を要するに、道重信教上人は、その常人の意想外に出する奇行をもつて、天下の人々に知られるところが多かつたが、それ



は、實は、上人の一面にすぎなかつたやうに思はれます。私をして言はしめるならば、上人は、學をも徳をも兼ね備へてしかも新しい識見をも具備してをられた新時代の高僧であつたと申しあげねばならぬと思ひます。

さきに述べた佛學院の經營のごときも、専門僧侶以外の人々に佛教の知識を與へんとするものであつて、あの當時に於ては、たしかに新しい識見に基づくものであつたと言はねばなりません。増上寺の法主になられてから間もなく、大正十四年六月十四日には、みづから進んでのマイクロフォンの前に立たれたこともありました。これも、宗教放送のトップを切つたものとして、記録に値ひする舉であつたと言へませう。

宇部の松月院は、前にも述べたやうに、實に貧弱な田舎寺でしかありませんが、この寺の境内地には、寺とはまつたく不似合な立派な圖書館があります。これは、道重上人の多年の苦心經營になつたもので、大正十一年に竣工して、道重圖書館と稱せられてゐるのですが、その中に藏せられてあるものは道重上人御自身の藏書數十萬卷であつて、しかもその中には、上人の手寫になる寫本が數千卷も含まれてゐるといふことです。

昭和五年八月、腦溢血に倒れられ、それ以來は、主として松月院で養生されてゐたが、昭和九年一月二十九日つひに入寂せられました。合掌。

美しき鳥



北林透馬

裏切られた、と言つては言ひ過ぎになるかも知れない。
何故と言つて、僕の戀は片戀ひにすぎず、僕がそんなに
アイリーンを愛してゐたのだと言ふことを、恐らくアイリ
ーンは、氣附いてはゐなかつたに違ひないのだから。
僕の戀はそんなにも祕めやかに、いちらしいほどの戀だ
つた。それが十九歳の少年の、生れて初めての戀だつた、
と言ふのに。

僕はアイリーンを……いや、止さう。今此處で、今更ア
イリーンに對する想ひの數々を、どんなにならべたてたと
ころで、去つてしまつたアイリーンが、ふたゝび歸つてく
るわけも無いし、くだかれた僕の心の傷手は、どういやし
やうも無いのだから。

アイリーンは、僕を捨て、ヨーロッパの片隅にある彼
女の故郷へ、彼女のフィアンセを追つて去つてしまつた。
いや、僕は、彼女にそんなフィアンセのあつたことさへ、
ほんとうは、その時まで知らなかつたのだ。

アイリーンが去つてしまつた後の僕は、水を失つた草花
のやうに、くつたりと頭を垂れ見る／＼生氣を失つて行き
身も心も蒼ざめ果て、痴呆のやうになつてしまつたけれど
それを人は、あまりにもろい少年の感傷だと嘲けるであら

うか。

Jと言ふ、ドイツ人の經營する、キャソリックの大學の、ドイツ文學科の學生であつた僕は、自分の専攻する學問に興味を失ひ、人と人の世に嫌惡を感じ、のがれるやうに、都を離れて島に渡つた。

島と言ふのは三宅島で芝浦から夕方、小さな島通ひの汽船に乗ると、翌朝はもう、黒いやうな太平洋のまんなかに、ぼつんと浮いてゐる、その島に着く。

買つたばかりのドイツ製の寫眞機を賣つて、少しばかりの金を作つたので、島での素朴な生活なら、二週間や三週間はもつだらうし、その内には、もう一度立上る生活意志と言ふか、生命力と言ふか、その時の僕の失つてゐたものも、取戻せるかも知れない、と思つたからだ。

黒い太平洋と言つたけれど、それはほんとうに、ブリウ・ブラックのインキを見るやうな黒さで、青いとか、蒼いとか言ふやうな言葉では、もう表現することの出来ないやうな、

ところとした、深みを持つた海の色である。

小さな汽船は、こまかくローリングし、ひと晩ちう僕は眠れず、甲板に立つてゐたが、その夜明け前の、ミルクいろの朝もやのなかに、もくもくともりあがる黒い大洋を見、この黒い大洋のなかに、ぼつんと浮いた島の姿を見た時、その景色の新鮮さに、僕は思はず呼吸をのんだ。素敵だなあ……

汽船は小さな汽船であつたが、防波堤のない島の海岸には、直接に横着けにならず、さらに小さなハシケに乗り換へるのだ。

朝もやのうちに、ぼんやりと浮んで見る島の姿は、大きなゲンコツのやうな形であつたが、汽船はすこし離れたところに碇をおろし、ぼう……と汽笛を鳴らす。

その汽笛の鳴る前から、汽船の姿を沖に見た頃から、海岸に待機してゐるハシケは、汽船を目あてに漕ぎ出してくるのだが、それが黒い波の間に小さな昆虫のやうに見える。

黒い波は、もくもくと持ちあがつては、汽船の横腹を打ち、小さな汽船は、その度毎に、

大地震のやうに揺れるのだが、僕は、ともすればよろけさうな足を、しつかりと甲板に踏んまえて、素敵だなあ、と島の姿に見とれてゐた。

何か、もうそれだけでも、僕の胸はぐつと大きく擴がり、聲を出して、何か呼びたいやうな氣がする。

近附いて來たハシケを見ると、これはまた小さな小舟で、發動機も何もない、三人の漁師が、よいしや、よいしや、とかけ聲をかけ、ぎしぎし、ぎしぎし、櫓を押してくるのだが、その漁師の、セビヤ色に焼けた半裸體の脊中には、朝の陽がクリームのやうにつやつやとひかつてゐた。

汽船からタラップがおろされ、そのタラップからハシケに乗り移るのだが、

「お客さん、氣をつけてくださいよ」

汽船のボーイが、僕の荷物を取つて、ハシケに投げ込んで呉れたが、このタラップからハシケに乗りうつる作業は、思つたより困難であつた。

何故と言つて、太平洋の荒波は、ちよつと見た眼には、些して大きな波とも思へないのが、これがぐうツと持ちあがつてくると、ハシケは二三メートルも高くあがつてくるし、波が下ると、またハシケは、二三メートルも下つてしまふ。タラップの端と、ハシケの船端とが、丁度うまく一列の線に平行した時に、身輕に飛びうつりしてしまはないと、ハシケの船底へ、二三メートルも叩きおとされてしまふか、反對に、海へ——まッ黒い太平洋の荒波のなかへ——マリのやうに跳ねとばされてしまふだらう。

僕は、鼠をねらふ猫のやうと、呼吸をころし、持ちあがつたハシケがぐらツとさがつて行く腰間に、ハシケの船端に足をかけ、ひらりと……いや、とても、そんなに巧くはゆかなかつたが、でも辛うじてハシケに乗りうつた。

僕のあとからは、大きな荷物を持つた、島の人らしい男たちが、四五人つといて降りたが、誰も慣れてゐると見え、僕よりは巧く乗

りうつつたやうであつた。

みんなハシケに乗りうつつたな、と思ひ、汽船のほうを見ると、汽船はもう四五メートルも離れ、黒い大きな波が、ぐらツと海坊主のやうに頭をもたげ、僕等のハシケとの間をさえぎつて、汽船の姿は、たちまち半分以上も言えなくなつてゐた。

ハシケは、大きく向きを變へ、三人の漁師が、よいしや、よいしや、と櫓を押してゆくのだが、汽船はがらがらがら……と碇を巻きあげ、ぼう、ぼう、ぼう、……と汽笛を鳴らして、大きく向きを變へ、沖のほうへ、見えないうち島に向つて出帆して行つた。

眞反對に、離れ離れに去つてゆくハシケと汽船とは、見る見る距離をつくつてゆくが、波がくる度に、汽船の姿は、吞まれたやうに消えてしまひ、あんな小さな汽船に乗つてゐたのか、と今更のやうに、不安を感じたりする。

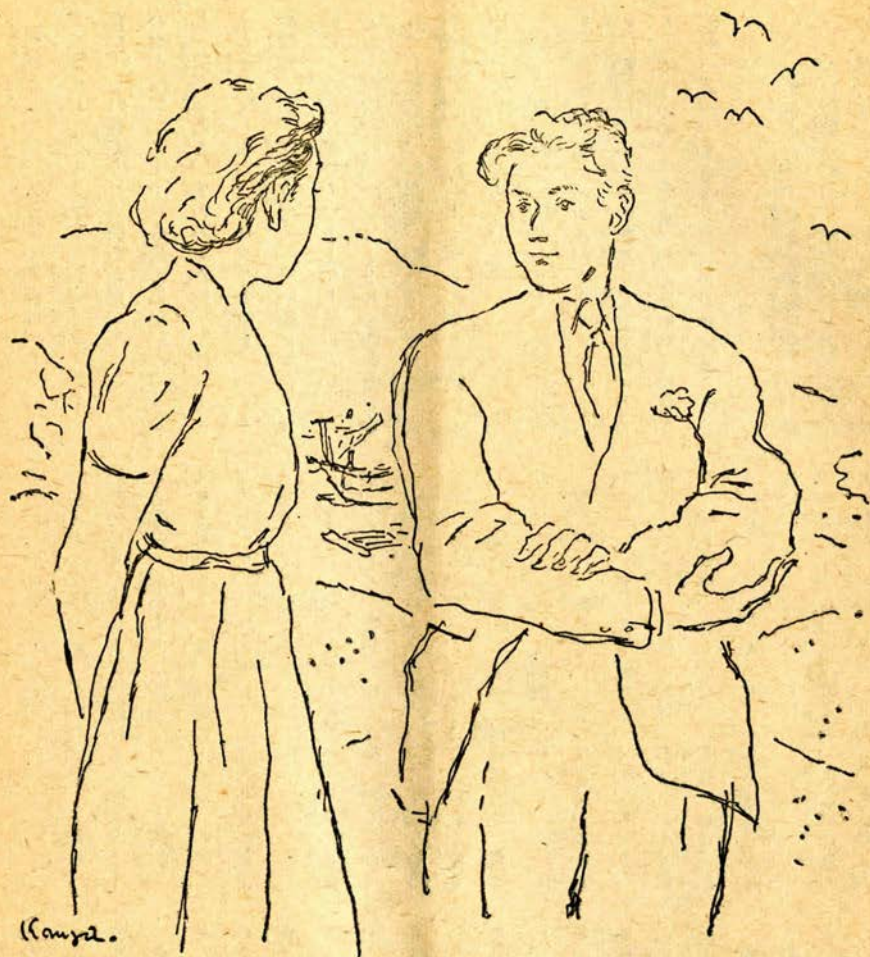
ハシケが、海岸に近附くと、海岸には島の人たちが、男も、女も、子供も、ずらりと列

をつくつてハシケの着くのを待ちかへてゐる。その姿が、その顔が、だんだんハッキリ見えてくる。

朝はもうすっかり明け離れて、あんなに深くこめてゐたミルクいろの朝もやは、もう山の上のほうに、すこしばかりたなびいてゐるだけで、海岸の白い砂は、キラキラと寶石のやうに輝き、列をつくつて立つてゐる島の人たちの全身には、朝の陽がみつみづして降りそよいである。

山の上のほう、と僕は言つたが、海岸は、廣さにすればほんの僅かの幅で、白い砂濱についで二三列の家なみが見えるばかりで、その背後は、切り立つたやうな石の斷崖で、斷崖の上には松がたくさん生えてゐるが、その松の木のあたりを、意でもあらうか、鳥が悠々と輪を描いて飛んでゐた。

海岸は砂ばかりで、船の着く設備はまったく無く、それ故にハシケは、波と一緒にさざざざ、……と砂を噛んで岸に乗りあがれるのだが、大きな波が遠慮も無く、どかん、ど



(Camp.)

かんと背後からぶつかつてくるのでハシケはマツチ箱ほどにも多愛なく揺すぶれ、そして僕はハシケから岸へ飛びうつる時に、とうとう波をかぶつて頭から、ぐツしより濡れてしまつた——

「まあ、たいへん……」

お氣の毒に、と、その時、馳けよつて、水に濡れた僕の帽子をとり、上衣を脱がして、手早く手拭で水を拭いてくれたのがユキだつたのだ。

さうだ、ユキのことを考へると、僕はほんとうに不思議な氣がする。あれが運命と言ふのなら、僕は運命の神さまの氣まぐれないたづらに感謝すべきかも知れないけれど。

ユキの姿は、ハシケのなかゝら僕にもハッキリと見えてゐたのだ。セピアいろに焼けたたくましい濱の男たちの半裸體の姿にまちつて青い洋服を着た若い娘らしいユキの白い顔にしきりと手を振つてゐる、その白い美しい腕と

は周囲の人々からまつたく切り離された、ひどく鮮明な印象であつたから。

おや、島にもこんなスマートな娘がゐたのかしら、と僕は、吸ひ寄せられるやうに、その青い洋装の娘に、視線をうばはれてゐたのだ。僕が、船を降りる時、あやまつて水をかぶつたのも、若しかしたら、その爲だつたかも知れないのだけれど。

思ひがけない、自分が心を惹かれてゐた少女に、そんな親切を示され、僕はどきまきして赤くなりながら、有難う、すみません、すみません、と幾度も頭を下げた。

その僕たち二人の姿は、濱の人たちの、むきだしの視線にさらされ、それに気がつくといッそ僕はどきまきしてしまつたが、ユキも少し頬を赤らめてゐたやうだ。

「あのう、宿屋は無いでせうか。僕、當分の島に居やうと思ふのだけれど」

甚だ唐突ではあつたけれど、その時の僕には、そんなことしか言ふことは無かつたし、さう言ふ方向へ話題を轉換するのが、その場

合、氣持を救ふ唯一の道だと思つたからだ。

「宿屋ですか？」

ユキは果して直ぐに普通の表情を取戻し、さあ、何處が好いか知ら、と言ふ風に、ちよつと首をかしげ、眞面目に考へ込んだ。

ユキ、ユキ、と親しさうに名前を呼んでしまつたけれど、その時の僕は、無論まだユキの名前など知らなかつたし、ユキの言葉も、僕にはちよいと眞似られないのだけれど、島特有のアクセントがあり、なまりがあつた。

ちよいと考へたユキが、では御案内しませう、と言ふ風に、先に立つて歩き出したので、僕は素直にその後に従つて行つたのだが、ユキは濱邊にちかい、一軒の瓦屋根の家の前に立ちどまり、此處です、と眼で知らせた。

家の入口には、別に旅館とも何とも書いて無かつたが、クレップのシャツを着た老人が立つてゐて、それが其處の家の主人らしく見えたので、僕は挨拶した。

「小父さん、部屋ありますか？」

併し老人は、黙つて僕とユキとをじろじろ

見較べながら、極めて不氣嫌さうな顔をしてゐるので

「僕、一月ほど泊めて貰ひたいんだけど。

…：不可ませんか？」

もう一度、さう言ふと、老人はいきなりユキに向ひ、何か僕には解らない、島特有の言葉で喋り始めた。

それに對して、ユキも二言三言、何か答へ

たが、その様子は何かユキが叱られてゐるやうであり、言葉の意味は解らなかつたが、僕は何だか不安になつた。

「何うしたんですか。この小父さん、何か怒つてゐるんでせうか」

ユキに訊ねると、ユキはすこし羞しさうに笑つて

「あたしの家へ連れて行け、と言ふのです。

このお客さんは、お前の家のお客さんだから、此處には泊められないと言ふのです」

「だつて、あなたの家は宿屋では無いんでせう？ それとも、宿屋なの？」

「えゝ。…：でも、この山を登つて、二キロ

も行かなければなりませんから」

なあんだ、そんなら僕はあなたの家へ行き
ますよ、と僕は笑つてすぐに歩き出したが、
すると宿屋の小父さんも、初めて顔をくずし
て、人の好ささうな笑ひ顔を見せた。

「ほんとに、あたしの家へいらつしやるんで
すか？汚いんですよ、あたしの家は」

ユキは、なにか自分の家へ僕を案内すると
言ふことを、ひどく氣にし、羞しがつてゐる
やうであつた。あたし、決して、お客を奪る
ために濱へ行つたり、あなたに、あんなこと
をしたりしたわけやアありません、と、ユ
キは、それが言ひたかつたのであらう。

「あたし、船が着く時は、いつでも濱へ船を
見に行くのです。船は一ヶ月に二度しか來な
いのですもの」

ならんで、切り立つたやうな斷崖の細い路
をのぼりながら、ユキはそんなことを言つて
ゐた。

單調な鳥の生活では、一ヶ月にたつた二度
の、東京からの汽船が、何よりの楽しみだと

言ふのは、不思議のないことだらう。新聞も、
半月分までまつて、ドサリとそれで来るのだ
し、雑誌も、化粧品も、すべて「文化」の匂
ひのするものは、何もかも、その汽船で来る
のだから。

ユキが濱に立つて、腕を振つてゐたのは、
さう言ふ「文化」の匂ひと光りとに對しての
少女らしいロマンティズムからであつたの
だらう。

僕はユキを、青い洋装の少女と書いたが、
その青い洋装と言ふのも、近付いてみれば、
東京で言ふアツパツパと言ふ、あの素朴な簡
單服であり、そしてユキは木綿の手拭ひを無
雑作に頭にしばつてゐたのにすぎない。

だが併し、その素朴なアツパツパの、何と
言ふ美しさであらう。僕はアツパツパと言ふ
服が、こんなにも少女の美しさを、素朴に活
かしきる服だとは、まつたく知らなかつた。

それにしても、ユキの肌の美しさも、また
驚くべきであつた。鳥の娘、と言ふ言葉から
は、セピア色に焼けた、ゴーガン風のタチヒの

女たちの畫を思はせるやうな、逞しい娘しか
想像出来ないが、ユキの美しさは、それとは
まつたく正反對だ。

僕はその後一ヶ月あまり、島で生活し、島
の少女たちをたくさん見たが、島にはまだま
だユキのやうな、若しくはユキに劣らないや
うな、美しい肌を持つた少女が幾人もゐた。

島には、所謂流人と稱される、都會からの
文化人の血筋があり、漂流してきた白人の血
筋もあり、また古くから乳牛の飼育をしてゐ
る島の人たちは、牛乳を飲んだり、牛乳の風
呂に這入つたり、島の傳統とはひどくかけ離
れたヨーロッパ風の生活をしてゐる、と言ふ
やうな點もあるからかも知れない。

白人の血と言へば、ユキには確かにそんな
ものゝ匂ひを感じられるやうだ。

のびのびと伸びきつた四肢と、何よりも豊
かに厚い胸は、東京の少女たちにはまつたく
見られないものであり、彫のふかい立體的な
横顔には、去つて行つたアイリーンを思はせ
る、北歐的なメラニコリイの影がある……

アイリーン……いや、もうアイリーンのことは思ひ出すまい。
ほそい斷崖の小路を登りつめ、其處からは

平坦な小路がつゞいてゐるが、路の兩側は、噴火口から流れだしたやうな、黒い焼石ばかりで、その焼石の間々に、松がよきによき



Kanta.

と立ちならんでゐるにすぎない。そんな小路を一キロあまり歩いたらうか、やつとのこと

でたどりついたユキの家は、それでもこんもりした木立に囲まれた、岩陰にあつた此處です、汚いでせう？ とユキは僕を振り返り、僕を玄關に通すと

「いま水を持って來ますから」

と玄關につゞく、臺所へたらひを取りに行つた。

玄關、と書いたけれど、それは二枚のガラス戸がはまつてゐる、と言ふだけの、普通の農家にある土間で、土間につゞいて横には廣い臺所があり、土間の正面は大きな爐をきつた廣間になつてゐる。

太い大黒柱は、すゝで眞黒になり、破れた障子は三〇度ほど曲り、低い天井には、何やらゴミだらけの袋がいっぱい下つてゐる。

ちよつと呆れたやうに、あたりを見まわしてゐる僕の足もとへ、ユキが小

さなたらひに水を少しばかり入れて持つて來た。

「すみません」

これはユキが言つたのだ。あとで知つたのだが、この島では、水はすべて天水で、つまり雨が降つた時に、屋根から樋で水を取り、ためて置くのだが、だから水は赤味をおびて濁り、綺麗とは言へなかつた。

ユキは色んな意味をこめて、すみませんと言つたのだが、僕にはそのユキのいぢらしい氣持が、素直に胸に來て、一瞬、ぼつと眼のまゑがかすんだ。

家は決して美しいとは言へなかつたけれど、ユキとユキ一家の人々が、僕に示してくれたあたゝかい感情を、僕は何うして忘れることが出來やう。

僕は島での、ユキの家での一ヶ月あまりの生活を思ひ返すと、今でも胸の一番底のほうから、水のやうに美しいものが流れ出してくるやうな氣がするのだ。

ユキ一家と言ふのは、ユキと、ユキの兄夫

妻のことで、この三人で宿屋を経営し、兄が主人で、嫂がコックでユキは女中一言ふわけなのであらう。

兄夫妻は、その時丁度不在だつたので、其處には居なかつたけれど、ユキに案内されて部屋にとほり、濡れた服を脱いで浴衣に着換へ、何よりも一晩ぢうの汽船ですつかり疲れてゐた僕は、そのまゝ横になると、風通しの好い縁側で、座蒲團を枕に、ぐつすりと眠つてしまつた。

ふかい熟睡のうちに僕は、幾度も夢を見た。それはアイリーンの夢であつたが、その夢のなかのアイリーンの笑顔は、いつかユキの笑顔になつてゐた——

宿と言つても、旅行する者も少い島の生活では、宿屋と言ふよりも村のクラブのやうなもので、夜になると村の若者たちが、三人五人とやつて來ては、爐端に集つて酒を飲み、話し合ふ。

僕はその若者たちにまちつて、いろ／＼と話を聞いてゐるのに、少なからず教へられる

ものゝあつたことを特に記して置かう。

晝間は、ユキとユキの兄夫妻と、みんな魚海岸へ行き、其處へテントを張つて、兄が魚を取り、嫂がそれを料理し、そして僕たちはハイキングの若者たちのやうに、愉快に晝飯を喰べたことなどもある。

ユキ一家の温い愛情につままれての、島での一ヶ月あまりの生活は、僕の心と肉體の健康を取り戻し、僕は完全に、もう一度生きてゆく力を自分のうちに發見することに成功した。

見違えるほどに色も黒くなり、肉體も逞しくなつた僕は、そして一ヶ月の後に、島を離れて、もう一度東京に歸つて來たのだが、その時、僕の背後には、つまましくユキがつき従つてゐたことを、つけ加へて置かう。——
ユキは、いまだ僕は僕の好き人生の伴侶、僕の妻である。



姫路市山本浸水
ヂツと見てゐて怖れを知らぬ赤ん坊の眼

戀も無く父と爲りたる難祭
履歷書く子の眞剣な意志を聴く
評 第一句大變に結構、赤ん坊は佛だ、強い譯だ、第二第三は普通

島山町大輪清

み心の戯れ重し病の苦
花咲かす土はだまつて耕やされ
評 二句目の方がよいと見え、なんとなく含意がある

浦和市清水美江
球場のネット二月の風に委し
寝に歸るだけに明るい部屋を借り
評 人生の苦しいところを、さり氣なくいふ第二句に共鳴

福岡縣丸山千穂樹

死んだ子の位牌にうづく乳の張り
二度襟の乳のうづきなど大分乳に關しては詠まれてゐるので何とも損をする

神奈川縣河上隆吉

多の日や手紙を書いて暮れにけり
評 暮れちまひなどと言はぬ方が可
小樽平井正念

個性曲ぐその盆栽へ茶をすすする
島山町萬壽云海

五人囃子やつぱり笑つた顔がよし
朝鮮武内竹美

産湯わかす手に喜びの盛り上がる
王子區三野輪幸節

新らしい國旗が二つ路地の春
小樽市中村善節

寺の屋根大地を壓し月おぼろ
土佐横山苑圃

合格をはめてもくれぬ親の慈悲
京都市竹内はじめ

彈の痕あたりいささか陽炎へる
岸和田田中新芽

配給へそそくさとした雨戸なる
大森區森田法晃

靴と下駄圓き芝生の青さなり
栃木縣大輪清

あれからを風の心を識る力
門司無徳庵主人

金欄の袈裟み光のうとまれて
宮崎縣小牧富

たまに酔ふ叔父によつぽどある古事

大分縣正喜
念佛に胸のつかへは消へて夜

深川細田初枝
ままごとにう遣はれて切符制

宮戸師橋山亮圓
心とがむる事あり戻れば針仕事

朝鮮武内竹美
思ひすぎたしなめられて石を蹴り

北海通花田順往
子に壬の考へがある石を積み

香川縣日向法圓
盛衰の烈しさを知る月の照り

大阪市小林愚樂
貰ひ子とだあれも知らぬ愛に生き

北倉津古川喜作
共出へ愚痴などは無し模範村

島山町萬壽云海
たんぼほの堤の陽射し白い猫

不期し梅
その軍馬その軍犬よ恥つ事多し

廣島上原四十八
根芹汁一口口底へ吸ひのこし

川柳は高貴なもの、至極まじなもの、いくら我心を深く掘り下げていつてもよいものと覺へてお下さし、下段の參拜時は現柳壇の雄將の苦心作ですよく味得して下さい

投稿規定

はがきに一回句数に制限なし「淨土」編輯部柳壇係あてに送ること

川上三太郎

子福者の名前と違ふ子を叱り
同上

冬の月明暗正しビルデング
石塚實三
女多きを語れどおのれを語らざる

三條東洋鬼
言ひ勝てば父の白髪が眼に残り

龍振千糸
藥買ふ紙幣食しき手をはなれ

清水美江
寂黙なる舊師と座して多陽知る

津田清屈
美しさ保母の若さの眞摯なる

伊東千龍
人待てば川の流れのゆるやかに

岩井四塊
神國にわが家今日の掌を合す

木鷲足
轉業の元ゐた街の灯を歩き

木鷲足
骨ほそきうしろ姿は見ざるべし

兒玉はる
はきものを脱ぐによりそふこころもち

鈴木一吉
數へ日の一日休む珠數を持ち

田邊如樹
生きぬべき冬くさむらにふたつの歩

植木鬼佛
逃れんとあせればいつか座右の銘
福岡阿彌三

他人が逆らふ風が逆らふわれは
われに



小 さ な 悟 り

吉 田 絃 二 郎

今年は處の梅も例年より半月くらゐ早かつたやうに思ふ。小鳥の聲もいつもより早く、鶯は二月の廿七日に聞いた。三月五日多摩の川原に行き雲雀を聞いた。そして川に近い田圃の徑を歩いて鴨の羽根を拾つた。時折はこのころでもまだ鴨が飛んで來るのであらう。

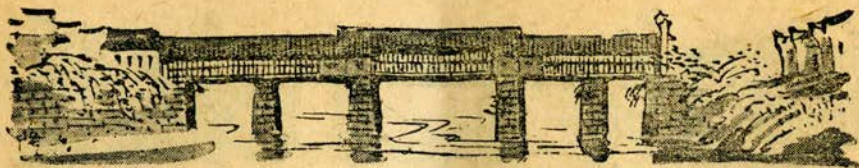
今日も富士はまだ眞白であつた。秩父、丹澤、大山も雪をいたゞいてゐた。こゝに移り住んでから十餘年、わたくしは雨さへ降らなければ毎日犬を連れて武蔵野を歩き、そして同じ山を眺めてゐるが、山は日も日も同じくして、しかも日も日も異つた感情を以てわたくしの心に迫つて來る。

わたくしは人生に對してさして未練は持つてゐな

い。しかし死んでしまへば、もう山を見ることが、山を歩くこともできないかと思ふと、すこし寂しいもし人生への執着といへばそんなものであらう。

若いころは誰でも花を見ても、山を歩いて、また來た春の花を期待し、山を豫期する。しかしもうわたくしたちの年配になれば今日見る花のみが花であり、明日の山路に望みをかけることはできないと思ふこともある。

若くして「何ぞ明日を期せんや」といふ悟りに入る人はよく／＼の善智識である。しかし下根の身にもその悟りは一度はめぐまれるものである。すなは



ち年齢といふものである。老といふものである。人間に年齢といふ考があたへられたことはまことにありがたい。ふだん凡夫のわたくしたちは老といふ機縁によつてはじめて死についての嚴肅な問題を自分自身の運命として考へるやうになる。

X

この老の境に詣つた心に映つて來る一草一木はそのありがたさを、その尊さを幾倍して感じられる。毎朝わたくしは佛前に供へるために茶を點て、そのたんびにわたくしも亦一碗の茶をいたぐことにしてゐる。わたくしは茶道といふものを知らないが、朝々茶を點てゝ喫することだけはつゞけてゐる。茶とは茶を點てゝ飲むことなり」といふ利休の言葉を文字通りにして、氣易い心で毎朝佛といつしよに茶を喫するわけである。だが、何か考へごとなどしてゐると一碗の茶の味を忘れたまゝ飲み干してしまふことがある。さういふ場合、わたくしはまことに相濟まぬやうな氣がしてならならぬ。茶の一滴一沫の味をこまかに、親切に、ありがたく感味し、拜味し

てこそ茶のこゝろであらう。

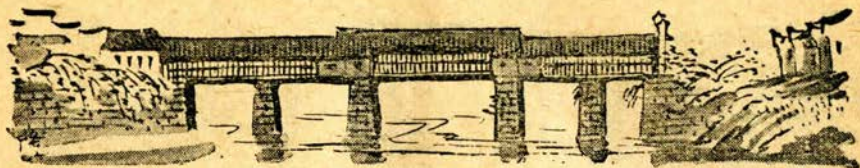
人生の一日一刹那をありがたく、こまかに、親切に拜味しつゝ生きて行くところにこそ、茶のこゝろ人生のこゝろといふものがあらう。

山に登れば岩間をくぐる眞清水が湧いてゐる。登山者の中には水飲みに拘んだ清水をたゞ渴を癒すためのみに飲んで、残りの水を惜しげもなくあたりの岩に投げ棄てる者もある。これがたいいていの人の人生の生き方、味ひ方である。一碗の眞清水を押しいたゞいて喫しつゝ、残りの水を丁寧に溪川に返す人は滅多にない。この生き方は道元禪師の生き方であり、人生をこまかな心、親切なこゝろに生きる人の生き方である。

凡夫も身の老をさすれば、この一碗の水を押しいたゞいて飲む心の境に達することができると思はれる。凡夫にとつては老も天の恩恵である。

X

明日は友人が弓を射に來るといふたよりがあつた。俄に的を張り、弦を懸け、弓を矯め、矢を直し



などしてゐる間に夜も更けてしまつた。張られたる弓を執り二三度、弦の音を立て、自らその弦の音に聴き入るころには、何を思ひ、何を悲しむものでもない。無我無心の境である。

子供のころ、正月を迎へるころになれば、父に風や風の絲を買つてもらひ、夜おそくまでも起きて、風に絲を着け、明日の春風を期待しつゝ眠れなかつたことがあつた。わたくしは弓を手にしては握り草の具合を改めたり、弓を踏んでは弓の形を整へたり弦を打つては鳴弦の音をたのしんで、明日の射を期待する現在の心を微笑ましくも亦寂しい心にも眺めた。

×

五十年前わたくしは枕頭に風を置いて眠つた。五十年の後わたくしは枕頭に弓を立て掛けて眠つた。かつてわたくしは一枚の風に人生のよろこびを感じた。五十年の後わたくしはたゞ一張の弓に人生のよろこびを感じてゐる。

わたくしは風の聲に幾度か眼をさました。わた

くしは枕頭の弓を思つた。

わたくしはたゞひとり眠つてゐることに氣付いた書齋にも、次の間にも、二階にも、離房にも誰れもゐない。たゞ一張の弓と一組の矢がわたくしの枕頭を守つてゐる。

人間は子供でも、大人でもたゞ一つの玩具さへあれば生きてゆくすべを見出すことができる。わたくしにとつて弓は一つの悲しき玩具でもある。

×

日に日に物がふ自由になつて来る。しかもありがたいことだと思ふ。紅葉のころ友人が訪ねて來たので裏の畑の里芋を掘り、味噌汁に入れて、たゞそれだけを馳走とし、茶を點てゝ友人をもてなした。友人もよろこんでくれた。わたくしの心も朗かであつた。こんなことも物の不自由な時代のおかけである。

空腹でもされたをりのために幾らかの食糧を準備せよといふやうなことが唱へられたことがあつた。わたくしも何か雑語でもとゝのへて置かうかと思つ



て東京まで出かけて行き、ある百貨店の中を歩いて見た。しかしわたくしは何も買はなかつた。わたくしの庭の梅は毎年一斗か一斗五升くらゐの實を結んでくれる。わたくしは薔の中の梅干さへあれば充分だと思つた。頭陀袋一つの生活、一簣一笠の生活、

京都吉水會の美舉

托鉢で集めた金二百圓を

「慰問浄土」に寄附す

京都吉水會では過般托鉢によつて數百圓にのぼる喜捨を集め、その内の大部分を同地方の警察署等を通じ各社會施設の基金に獻納して各方面から感謝されてゐました。が、更にその殘額金二百圓を江藤滋英師を通じて陸海軍病院に贈る「慰問浄土」の基金にと浄土宗務所事變部宛に寄附せられ、お國のために盡された白衣の勇士の方々に「浄土」を贈つて法味を捧げられました。

それがまことの生活であつた筈だ。一切を棄て、天地の懷に抱かるゝ生活、やゝそれに近い心境がわたくしたちの身邊に近づいて來たやうにおもはれる不自由な時代といふものがいろ／＼な尊いさとりを開かしてくる。

大阪誌友會の御案内

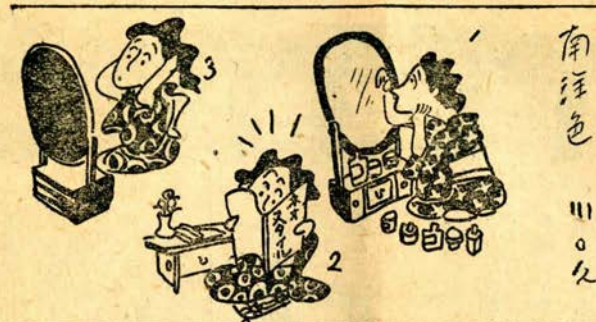
どなたも御出下さい

大阪方面の誌友會を左記の如く開催いたしますので萬障御繰り合せのうへ是非とも御來駕の榮を得たく御案内申し上げます。尙誌友會は誌友各位の親睦をはかり修養の資と致したいばかりでなく、未だ會員でない方々にもなるべく多數お出を願つて有縁の志とともに法然上人を讃えたいと存じてゐます。

日時 四月四日午後六時半より
場所 大阪市天王寺區生玉町法音寺
(市電上本町七丁目下車、西へ四ツ目ノ辻ヲ南ニスル)

プログラム

1. 講話 講師 中村 辨 康
2. 宗教紙芝居
3. 座談會 (午後九時終了の豫定)



南洋色
川口久

南進
かしこ



新漫画隊作

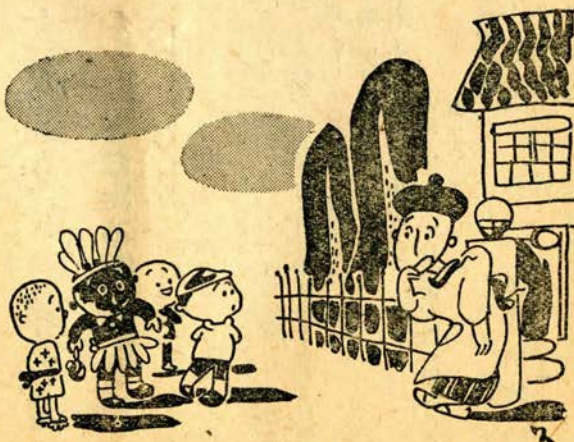


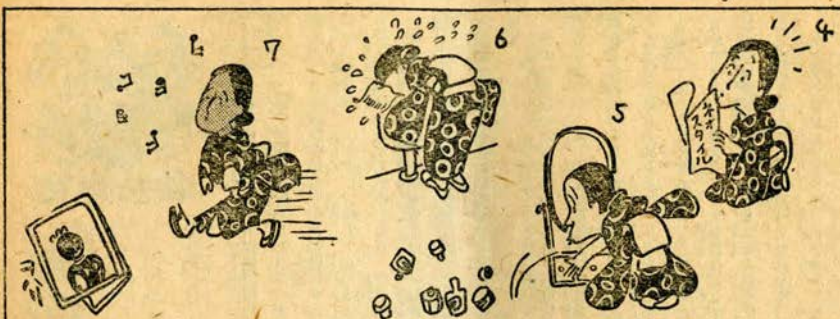
ふるさ父親
をき原賢次

「お前が南洋に
行くときの餞別
に石貨を一枚作
つてやるぞ無駄
遣ひするなヨ」

子供らの場合
「トクちゃん南洋の酋長さんだつてサ」

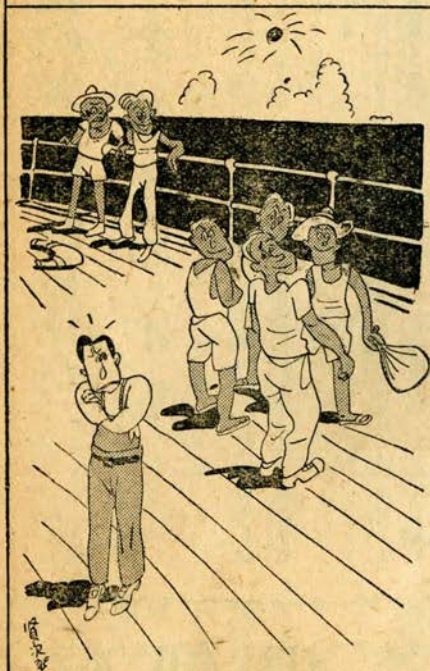
川口久





南進花嫁
山崎 善一

「お前みたいにお裁縫が下手だとお嫁に貰ひてがないヨ」
「大丈夫ヨ 蘭印へ行けばこうして布を巻くだけですむんですもの……」



南へ行く船の上

をぎ原賢次

「あの白ん坊も南へ行くのかいへーエあれでホ」

「チエツよせやい陽にやけぬ性分も又辛い哉」



乙女



談相仰信

佛敎の無神觀から見た

念佛敎の矛盾

(問)

釋尊の敎は畢竟するに超越神論の世界や天上の境地の問題を目的としたものでなく、否な寧ろ當時のパラモン教徒が信仰して居た迷信を打破して徹底的に現實の世界觀、人生觀に立脚して此の地上に生きて行くことに中心が置かれて居たのであり、従つて佛敎の眼目とする所は、宇宙の根本法則たる因果の原理を徹見し是と一致になり切ること、即ち主觀上に自己を眞空妙有の中に第二義的に生きたる爲の修養であり實行であると解釋して居ます。

佛敎に神淨の二敎があつて何れも私達に對する正しい敎でありますが、併し到底私達凡夫には畢竟空の因果の原理などに透徹することは不可能です。私達は業の不滅を是認しなければならぬと共に、永久なる流轉輪廻の束縛からも脱却することは出来ません。涅槃寂靜は遂に私のものでないことを知ります。そこで凡夫は彌陀の本願を頼み念佛して佛の加被力に抱かれつゝ易々と淨土に往生し成佛することが出来ることと淨土敎は敎へて呉れます。

ところが茲に私は大きな矛盾を感じて居ります。即ち前述のやうに釋尊は天上的な超越神論の世界や、大宇宙に於け

る超人的神佛の存在を認め給はなかつたとすると、今も云ふ處の念佛思想即ち神敎的な冥助を願ふことは釋尊の敎説と相容れないものではないかと云ふことです。

論理の上に立てば、私としては如上の見解になるのですが、ざりとて法然上人が凡夫救済の目的の爲に釋尊の示された原理を勝手に歪曲し給ふ言もなく、亦た古來の幾多の聖賢も殆んど念佛には諸善萬行を壓縮され、無量無邊の諸業が念佛の中に包蔵されてあることを主張されて居るのですから何か眞理が有るのだらうとは思ひますが、観覺聖人のやうに「たとへば法然上人にすかさぜ參らせて地獄におちたりとも悔いなし」とまでの打ち込んだ情熱が前に云つたやうな理論に抑壓され冷却されてしまひます。かうして冤つ追ひつしますが、結局のところ私は次のやうに考へました。

南無と歸依する自分と、阿彌陀佛の理想とが必然的に結合さるべき大きな原理が無くてはならぬ。そしてこの原理は必ず心理的に辨證され得なければならぬ。私は是非之れを知得し體證し度いと渴望します。尤も宇宙の眞有は悉く是れ因緣所生の理に依て生滅變化するもので、かく云ふ

談相仰信

當 擔

康 辨 村 中

(迎 歡 問 質)

自分も亦た其一つでありますから、私達人間は一切の理屈を抜きにして不平不満も云はず、唯だ自然法爾の心構へを以て生活を受め、時節の到来を待つて再び自然法爾と元の地水火風に還ればそれで事は済むのだと、かう氣安く達觀？してしまへば、夫れも一つの人生ではなからうか。イヤ古來の先德達も亦た或は結局此の種類の觀念に終られたのではなかつたらうかと。果して如何なるものでせう。

(京都・小林常人)

(答)

釋尊が迷信を打破し天上の境遇を目的として居られなかつたのは事實で



談相仰信

の意味にしか解して居なかつたものを止揚して「生命」的な観方をするとところに正しい「天」の意味を理解せ

すがさればと云つて超經驗の世界や天上的境界を問題にして居なかつたとは、例へば釋尊が成道された時、合掌して「南無佛」と云はれたと云ふ話や、歸依三寶を以て入團の定式とされたことや在家の人々には特に施論戒論生天論を説かれた事實や、四諦十二因縁八正道等を説かれて涅槃正覺（即ち超經驗の心境）を證すべきことを勧められた事や、さう云つた色々の事實を何う御覽になりますのでせうか。無論婆羅門教等の迷信的なものや神秘的なものは排除されましたけれども、一面にはむしろ婆羅門教等に説かれた教説を訂正して澤山取り入れられた事も事實です。例へば「天」の思想の如きも「第一義天」として取り入れられたのであつて頭から否定しては居られないのです。唯だ婆羅門では「存在」

しめやうとされたのでした。また因果論も因縁論も二つながら説かれては居りますが、因果論の方はむしろ初等教育であつて、それは唯だ物事の繋の關係だけを眺めたものですから、正しい原理にはならない爲に、縁起論を樹て、廣い横の關係をも眺め充分に事物の真相を観察すべきことを教へられたのです。是れ則ち「因果を以て因果を破ぶる」と云はれるものです。社會道德や人間戒律の上からは一應因果論を主とも致しますが、それは分り易いために一應の説明をしたままであつて一切の現象はあらゆる「縁」の和合綜合に依つて常に變化し推移し行くもので、一つとして固定して居るものはないのですから、凡ては縁起即ち綜合進動の姿であつて、それが悪い影響を與へつゝあるか、善い影響を與へつゝあるかの反省に依つて人間の生活行為の是正材料とはなりますもの、自然の現象には善とか惡とかの斷定を下すことは出来ず、精密に云へば人間行為としての善惡も、單に自己の一因にのみ依つて起つた

ものでなく、父祖の遺傳や社會の影響や色々な原因が内包されて居るのですし、それはまた變化しない固定的な善惡でもなく、常に變化しつゞけて居る善惡であつて、一因去り他因加はり間斷なく推移して居るのです。だからそれは單なる存在ではなくして變化し行きつゝある瞬間的存在の持續即ち生命的なものである譯です。此の故に萬有は萬有ではなく萬法であり諸行であり如來であるのです。然るを私達人間のみは己が迷執から色々な妄見邊見邪見を起して日常に惡業をするから流轉輪廻しなければならぬのです。私達は事實に於て「我」に束縛されて居ります。ですから進まうとはして居ますものの、それは唯だぐるゝ廻りをして居るだけですし、また自然法爾にあるがまゝにやらうとしても目標がありませんから謂ゆる放逸した野放途の状態で、畢竟は「執」か「放」か「迷」かの状態に外ならないのです。また貴君は「自然法爾の心構へで生活し時が來れば元の地水火風の四大に還ればよい」



談相仰信

と云はれましたが、是れこそ佛教の否定する單空觀であり斷見であると思ひます。「法爾」と云ふ言葉を何うお考へになつて居られるか存じませんが、果して貴君の御生活が本當に法爾の姿なのでせうか。若し欲望の起るまゝにまかせて居るならば法爾とは云はれません。それは自我です。放逸です。古來の先德達が果してかゝる生活で満足したでせうか。そんな單純なことなら何を苦しんで修養する必要があるのでせう。

極言すればデカタン主義と變りはないかとも思ひます。然し法爾とは邪見妄見偏見なき正見正業正命の姿を云つて居るのです。自然と云ふのも同じであります。其處に少しでも「我執」があり手前勝手な氣持があるならば、もう法爾でもなく自然でもありません。机が机のまゝに机としての眞の使命をおしみなく果して居る姿こそ自然法爾ですが、人間が果してさうなり得るでせうか。小言を云つ

たり泣き言を云つたり樂はしたいしお金はもをけたいしおいしいものは食べたいし見得は張りたいたい慈善や寄附などは成るべく少額に止めて置きたいし、考へて見ると全く我ながら淺ましいと私自身も時々恥かしくなりますが、反省して見るには見ますものの、中々理想通りにやれないのが私達凡夫の有様です。云ふは易く行ふは難しとやら云ひますが法爾の生活は凡夫としては容易のことではありません。

然し貴君御自身が本當に不平不満もなく自然法爾に完全な人間生活の眞實さに生きて居られるならば、誠に有り難い極みで、それはもう佛の生活になつて居られる譯です。然し單に四大に還ると云ふだけでは、此の肉體のみのことを云つて居るのであつて、本當の解決にはならないかと思ひます。四大が解散しても善かれ悪かれ今日までなして來た貴君の行爲はまだ御破算にはなるまいと思ひます。且つ假りにそれで一切切御破算になつたとしても、それで本當にお心から満足が出来る

でせうか。やはり人間でですから家名も存続させたいでせうし、死後の訪ひ弔ひもして貰いたいでせうし、お墓も残して置きたいでせうし、子孫の幸福も念願されるでせうし、色々自分そのものを何等かの意味で残して置きたいとお考へになりはしないでせうか。人間と云ふものはさう簡單には行けない筈だと思ひますがね。

次ぎに貴君は淨土や阿彌陀佛への信仰が釋尊の教説と矛盾して居るやうにお感じになつて居られると云ふことですが、それは佛教に言ふところの淨土や阿彌陀佛を「存在」として御覽になつて居るからこそ矛盾をお感じになるのではなからうかと想像します。はじめにも申しましたやうに存在觀の上に立つて居ては佛教のことは理解出来ないのです。一切の現象は生命的な流動であります。従つて淨土も佛も生命的流動態として眺めなくてはなりません。無量壽と云ひ無量光と云ふ言葉の意味をお考へになりましたならばお分りかと思ひますが、阿彌陀佛は最高の價值を發揮し



談相仰信

標がなくてはなりません。然し單にたち切る丈では前に申し申した様に放逸になり斷見になり自然主義になります。それには何うしても目標がなくてはなりません。

て居られる生命態であり光明態であり躍動態であつて單なる置かれたる存在ではありません。阿彌陀は無量壽であります。従つて阿彌陀の世界たる淨土もまた無量壽の國であつて個體たる存在ではありません。常に存在觀の上に立つて物を見、物を考へ馴れて居りますと、かう云ふ生命的な意味のことは諒解の出來にくいものでありますが、存在的な考へそのものが既に「迷」であり「執着」であつて、この考へを破ぶる爲めにこそ「縁起」の理が詳説されても居るのです。因果の理は一應存在觀の上に立つ人に對して理解を易くさせる爲めの假説であつて、まだ存在的な功利的な意味から脱却して居りません。

「存在觀」は「我執」です。此の「我執」を斷ち截らねばなりません。然し單にたち切る丈では前に申し申した様に放逸になり斷見になり自然主義になります。それには何うしても目標がなくてはなりません。然かもその目標は最も理想的な最高價值でなくてはなりません。即ち生命的なもの最高なる「無量壽」と、正しさの中の最高なる「無量光」とを目標とする時、おのづから「我執」は轉心して、たとへ瞬間であつても無量壽無量光の中に合一します。だから法然上人も「一念に一度の往生」と云はれたのもあります。念佛の「南無」は決して神秘的な冥助を願ふものではありません。「南無」とは歸命、即ち大なるみいのちの中に己が小さいのちを歸することです。また發願回向とも申しますが、南無の中に往生を願ひ己が拙なき心を淨き世界へ廻らし向けることであります。私達は元より如來の大慈悲の中に生かされて居るのですが、唯だそれに氣付かず居たのです。今まそれに氣付かせて頂いて如來大悲に「南無」するのが信仰であり轉心であります。釋尊も合掌せられました。これは理窟ではなく事實です。唯だ阿彌陀佛を人間的物的存在として（人間も實は物的存在ではないのですが）見やうとする爲に、考へがこ

んがらがつてわからなくなるのです。宇宙的一大生命態若しくは宇宙的一大意志態として、それを人格的に見るべきであり、凡てを生かし給ふ生命の根元であるから親の慈悲のやうな人格的大慈悲としてそれを受取るべきであるのに、つい今迄の習慣で存在的な意味に理解しやうと考へそこないをするから矛盾を感じたり分らなくなつたりするのです。之れだけでは御質問に對する全部ではないかと思ひますが餘り長くなりますから之れ位で御ゆるし下さい。そして之を基礎としてもつとよく御考へ下さいまし。お願いします。

飲めば益々

元氣旺盛

無臭(にんにく粉末) コナワサビ
臭(固形にんにく) そてつ粉末
特約店大募集

静岡市上谷町

神谷昌孝

電話二八六三番
振替東京一四六五一番

會 員 通 信

東京方面第三回

誌友會を開催

江藤 澁英師の講演や
『宗祖一代記』幻燈の映寫

東京市深川、城東、江戸川三區の本會誌友各位の親睦をはかるために去る二月二十七日午後六時半から深川區三好町正覺院に於て誌友會を開催しましたところ東京教務所長鈴木在念師を初め四十數名の誌友各位が出席し盛會でありました。同會は先づ石塚龍學師導師のもとに戦歿將士追悼法要を営み、次いで一同念佛會を修してから稻田稔界氏司會により會を開きました。最初に教學部長江藤澁英師の「所感」と題する講演があり、

同師は日本佛教の中に於ける淨土

富浦海濱學校に
慈母觀音像を安置

開眼式と座談會

導師は大島徹水法主

本會々員の和田正系博士は同博士の校長たる富浦海濱學校の講堂に慈母觀音像を安置すべく、文展審査員國方林三氏に製作を依頼してあつた觀音像がこの程出来上つたので、これが開眼式を去る二月二

宗の特異な地位について論じてから、法然上人の末しくりしい御性格を仰いでわれ／＼一同は修養に努めなければならぬことを強調されました。次いで江藤師の解説により「法然上人御一代記」の幻燈を映寫し、これが終つて座談會に移り、種々意見交換を行つて同十時散會しました。

十七日午後一時から同海濱學校で増上寺法主大島徹水師導師のもとに盛大に舉行しました。この日日本赤十字千葉縣支部長渡氏を初め町長、警察署長、驛長、町内有志、學校生徒約百五十名が參列し、開

◇私の悪い心に佛様のお光りで照らしていただき正しい佛様のやうな信仰の深い心にと育てて、それから佛様を信ずる善男善女を正しい信仰にと導き、ねむつてゐる心を目ざめさせ、お念佛を唱えることの出来るやうにいたしたいと存じます、これがために「淨土」を讀み心のかてとしたいと思ひます。

(青森縣東津輕郡 丸尾久一)

◇垣の椿は鮮かに、雪に折れし水仙に香残る、朝陽輝き出て、枯る花園の土に早春の芽生青し、寺垣の外の共同倉庫に新米荷車のきしる山坂、何れも元氣よく、新天地の恵に嬉々として働くは尊し、會員各位の御健闘を祈る。

(廣島縣加茂郡 福田龍山)

◇先日送つていただいた「法然上人法語抄」をもつて毎月三日、十六日に當寺で講義をすることゝい



れ、これ亦いろいろ意見に散會しました。
を交換して同七時頃盛況裡

法然上人を讀ふる

音楽と講演の夕べ

名古屋新聞會館で催す

前田師の晋山

大乘文化協會が主催とな
り、本會館に淨土宗尼張數
區の後援のもとに去る二月
二十三日午後六時半から名
古屋新聞會館で法然上人を
讀ふる「音楽と講演の夕べ」
を開催いたしました。先づ
宮城遙飛、皇軍感謝の合掌
默禱をなしてから櫻花高等女學校
聖歌隊の法然上人奉讃歌、小林楠
川、椎尾辨匡兩氏の講演、法然
上人御作和歌の獨唱、合唱等が
あり同九時半盛會裡に散會しまし
た。

和田博士のお賽銭寄附

別項記載の富浦海濱學校長和田
正系博士は自宅の前にお地藏様を
お祀してゐられるが、今回そのお
賽銭廿圓を本會に寄附せられた、
依つて本會としてはその淨財を生
かして使ひたいと目下使途考慮中
である。

たしすでに第二回を終えました。

(長野縣東筑摩郡 中島敏文)

◇野島無量子先生の「梅の精舎」

に一掃除、二勤行云々とするを拜
見いたし、更にこれを再讀只今の

青年僧に是非讀ませたいと存じ又
往年の小僧の働きぶりを思ひ出し

ました。(高知縣幡多郡奥山萬圓)

◇「不調不請の友」と題する故佐
藤伍長の思ひ出の記事を見て、お

世話下された婦人會の皆様之美し
いお心に感激いたしました。(青森

縣平野良子)

◇過般本欄に會費を雜誌定價通り
に年額一圓五十錢に値上げいたす

豫定である旨がのつてゐました
が、その後如何なつたのでせう

か。支部會費を集める都合もあ
り、値上げするものなら早く斷行

したら何うでせうか。(福島縣津南
支部)

(海濱學校の開眼式)

眼式を終つてから大島徹水師の御
法話を聞き、同三時半散會しまし
た。尙これが終つて同五時から和
田正系博士と本會本部から出席し
た佐藤賢順氏を中心にして同地方
の誌友諸氏により座談會が催さ

われらの實踐座談會

司會者

本日はお忙しいところをお集り下さ

いまして有難う御座りました。日常生活の

あらゆる方面がグン／＼變つて來まして、

私どもは早く新しい生活に醒め、更に進ん

で時局下にふさはしい生活様式を打ち建て

たいと考へてゐます。それで本席はわれわ

れ淨土教徒としての生活の中で、一番具體

的な肝要な事柄を聽かせていただき、すぐ

そのまゝ眞似の出来るやうな實際の御經驗

をお話し願ひたいと思ひます。

それでは先づ一番われ／＼の直接重要な問

題である節米についてお願ひいたします。

A

節米と云つても米が事實不足してゐるの

だから、あるだけの米で我慢をして足りない

ところは代用食をとり、それで不平不満

を云はないやうにしなければなるまいと思ひます。

B いやしかし米が不足だから我慢しろと

か、又は大切にしろとか云ふだけでは節米

の實があがらぬでせう。

C その通りです。以前から米を決して無駄

にしたり粗末にしたりしたことはないの

すし、無理に澤山食べ過ぎると云ふことも

ないのですから……

D そこに節米の難かしさがあるので、これ

までの節米運動が大體うまくゆかなかつた

のも、唯大切にしろ無駄にするなと云ふ點

を強調するに過ぎなかつたからです。

E だから節米の實をあげるには何うしても

信仰が基とならなくてはいいぬと思ひま

F 私か前線から歸還して原隊に向ふ汽車の中で出来ごとですが、或る驛で汽車辨當を買つて喰べた

時に、私は僧侶としての普段の習慣から汽

車辨に合掌してから箸をとつたのです。す

ると側に乗つてゐた老婆が、それをみて、

「兵隊さんさへお辨當を拜んでから喰べる

のですに……有難いことです」と云つて

急に泣き出してしまつた。私は他に見せる

つもりで合掌したわけでないの、一寸困

つてしまつたが、おかしなもので一緒にゐ

た澤山の兵隊がこの様子をみて、皆辨當を

おしいたゞいてから箸をつけたものでした

成程、それはよいことです。

H G 佛教には昔から食作法があつて、食事を

とる前に先づ食物に感謝し、次いでこの食

物を以て營養をとり正法を普くしろめよう

と云ふわけです。



I 食作法は一般家庭の忙しい日常生活にむかないところもあるので、その眞の意味を、解り易く、行ひ易くまあ現代的略式とでも云ひますか、新しい食作法を創る必要がないでせうか。

J 新しい食作法を創る必要があると思ひます。しかしその前に食前には必ず合掌瞑目してお念佛を唱える習慣をつけたらよいでせう。

K 食前に合掌し、食物に感謝の念を捧げて食事をしてゐる家庭はいくらもありましょ。ただ各家庭の全部にゆき渡つてゐないだけです。

L だから食前には必ず合掌する習慣を兒童教化の上から兒童に徹底させることが大切でせう。

A われ／＼の子供の頃は、御飯をこぼすと目がつぶれると叱られたものだが、今になつてもこの教育が有難いと思つてゐますよ。

B お米は菩薩さまと云はれ、汚いところに落ちた御飯でも洗つて食べさせられたものですが、子供の時の習慣は今に未だ抜けずにゐます。

出席者

赤尾光雄	糸山天真	栗本俊道	佐賀一海	佐藤密雄	佐藤良智	島野禎祥	中村康隆
------	------	------	------	------	------	------	------

本部側

成田良穂	濱野義光	山田巖雄	佐藤賢順	辻重光	道瀬幸雄	村瀬秀雄
------	------	------	------	-----	------	------

M それよりもつと手近なところで、食堂で帽子をかぶつたまふ食事をしてゐるのはいけませんね。私は食堂でも帽子をとつて頂くことにしてゐます。

N ある料理屋の話で、近頃は食物の残りもの中に煙草の吸ひがらを入れる人が少な



くなつたと云つてゐましたよ。煙草の吸が
らを入れられると残飯にもならぬさうです
が、矢張りこれは近頃のよい傾向の一つだ
と思ひますね。

S つい一二年前までは料理屋の女中や給仕
人などは、客の食べ残しの皿を片づける

時、まだろくに手も付けないやうな皿の
料理でも、まるで塵を捨てるやうに、始末
をしたものだ。洋食の宴会などではそれが
一層甚だしい。あれでは残飯にもならない
でせう。客の方でも、女の人などは、綺麗
に食べてしまふのが何だか恥かしいとも
思つてゐるのか、必ず残す。妙なみえから
ですがさうでした。さういふ人達が此の
頃、何が無い、かが無いと言つては苦情
を言ふ連中なのです。一寸いゝ氣味だとい
ふ氣はしませんか。大體、物についての考
へ方がまるで違つてゐるのです。物をたゞ
の物だと思ふからそんなことになるのです
が、日本では思想の歴史からいつても、物
をたゞの物だと思つたやうな生活態度は曾
てなかつた。敬虔な心持で物を貰いたので
す。物に對する態度を根本的に變へるの
なければ駄目です。…去年の秋に、文部
省の主催で大學や高等専門學校の先生が
原道場で五日間ほど起居を共にしたことが
ありますが、その時も箸を執る前に一同が

默想をして、頂きます、と言つてから箸を
執りました。然しこの默想は何を默想する
のが別に示されてはゐなかつたので、一
體默想の内容は何か、と議論をする人など
があつたのです。こんな時に、佛教が何百
年も教へてきた物についての考へ方、一切
恩物とか天地の恩とかいふ内容を示したら
何でもなく片がつくではありませんか。

B 要するに食物を尊ぶ精神がないからいけ
ないので、農村の人にはそんなことがない
が、何うも都會の人は食物を大切にしま
い。だから節米も仲々出來難いわけなのだ
らう。

G 適量を完全に食へること、食物に感謝
し、食物をとる意義を知ることが大切だと
云ふことになりますね。

E だから信仰のある人、お念佛を唱へる人
ならわけないことで、節米の徹底には何う
しても信仰心を養ふことが先決だとも云へ
るでせう。

司會者 節米についてはこの位にして、次に

A これは一言で云へば歡喜奉行といふことになりませう。

C 少慾知足といふことも大切です。ものが足りないとなると急に欲しくなつたり、餘分にまで持つてゐたいと云ふ氣持は随分賤しい心だと思ひます。

S もともと少慾知足といふ言葉には高遠な理想が含まれてゐる、少慾といつても慾をすつかりなくしてしまへといふのではなく、最少限度の慾、つまり佛道修行の慾だけは残してをいて、その爲に必要な物だけを取つてもよいといふ意味なのです。だから、せめて一般の人がその理想の半分でも理解して、生活の物質は精神的によい生活をするために必要とするのだと考へたらよいのだが……

司會者 しかし實際には無暗に物を欲しがる人が多いので困るので、これは何うしたら

改まるのでせうか。

L 私は人ももつと素直になればよいと考へてゐます。他から何か云はれるとすぐその裏を考へたがる癖がある。つまり何んでも反動的に考へる人がある。これはいけないことで人間がもつと純情になる必要があらうと思ひます。

K それを云ひ換へれば絶対信頼の氣持でせうね。自分のからはらひを捨て、親心に副ふ

と云ふことでせう。

S ところがそれが仲々難しいのですね。といふのは近頃の一般の人々の中には、當になるもの、信用できるものが一つもない、といふ氣持を持つ人が多い。例へば何日何日純綿の配給があるといふことが新聞に出てゐる、その日を當にしてゐても一向にそれらしいことがない、といふやうなことが重なるからでせうが、僕の友人にも「もう新聞に書いてあることなど一つも信用しないよ」と憤慨してゐた人があります。然しそんなことが重なつたからといつて今の時勢を絶望するなどいふのは餘り個人主義的です。何しろ乗るか外るかの大芝居なので



すから——芝居といつては不謹慎かな、世界が舞臺で歴史は芝居だといふ意味での大芝居なのです、だから、命がけでない者など一人も居やしない。一寸した手違ひからうまく行かなかつたことを、これでは今の

世間は信用できないなどいふのは、どうかと思ひますね。もつと大きなものに頼り切る氣持であればよいのです。

N 先日ある會合の席で、某少佐の話に他力本願の正しい意味を解すなら、これが即ち減私奉公であると云ふことを云つたが、減私奉公の精神は念佛生活からこそ生れるといつてもよいわけですね。

S その通りだと信じます。減私奉公はたしか林内閣の時にできた綱領ですが、別に新しい言葉でも何でも無い、聖徳太子の十七條憲法の中の背私向公、私に背きて公に向ふを修整したので、太子は佛教精神の眞髓をこの言葉に盛り込まふとなさつたのですから、それがそのまま他力本願の信仰でないわけはない。大きな力に頼り切つて自我を空にした姿……こゝからでなければ眞の意味の奉公は出てこないでせう。

K お互ひが信頼し合つて、上意下達を徹底させ、また下意上達を完全になるやうにしてゆくやう努力してゆかなければなりません。

ん。

D 一億一心といふことは、つまり和合僧の建設といふことだから、これ亦お念佛の普及徹底と同じことになります。

A 一般に理窟が多過ぎるやうです。これは自由主義の弊風が今に残つてゐるのでせうが、理窟ばかり云つてゐて自分でやることも充分しない。

F 今までのやり方だと、云はれたことの半分位しか實行しない。この位やればもうよいだらうと自分で決めてしまつて平氣である、こんなでは將來の日本建設するには何うしても力が不足します。職域奉公といふことも、云はれたことをそれ以上にやり抜くといふところにあるのではないでせうか。

L また歸命し奉るといふ心境が大切です。それには信仰が必要であり、特にお念佛を申せるやうにしなければいけないでせう。又充分頼るに足るものがないではないかと云ふ人もあるが、これは要するに純情さがなければあります。

司會者 次に近頃大部問題になつてゐる健全な娯樂、娯樂の言葉がよくないと今は和樂といふことについてお願ひします。

M 娯樂といふことと享樂といふことと何うもはつきりと區別をしてゐないせいか、娯樂といふことに多少神經的になり過ぎてゐるやうですね。

B 一般に悲壯觀の強い時には何うしても笑ひを求める傾向が強くなるものです。又殺風景な情況の下では殺伐な方面のことは極力避けなければならぬ。

I 健全な和樂についてもつと眞面目に指導し助長してゆかなければいけないと思ひます。

H 娯樂の指導については餘り強要的に禁止をするのは慎重に行ふべきもので、或る程度まで寛大な氣持で當るといふことも大切ですよ。

C 産業組合で實施してゐる移動芝居は結構なものであるが、何うも經費の點で、手軽に何處にでも催してもらふといふわけには

ゆかないやうです。大きな會社では音楽をやつてゐる所が多いのも宜しいですね。

A N
お寺が主權になつて謡曲とかお能とかを計畫してもよいと思ひます。昔からの御詠歌や盆踊り等もお寺でやる娛樂になつてゐたのでせう。



M
隣組の常會をお寺で開いてゐる所も澤山にあるやうですが、この常會にもお寺が主權になつて何か餘興を入れるやうにし

E
勿論巡禮は今云ふハイキングとは大分違ひますが信仰的な氣持が先で、宗教情操を持つ、まあ何んと云ひますか精神的、肉體的完全に具備したハイキングですかね。今のハイキングに信仰的情操が加味されれば深みが出ますね。

K
八十八ヶ所詣り等の巡拜、巡禮は今で云ふハイキングだつたのでせう。これらの事をもつと組織的に計畫して大いに助長して行つたらと考へますね。

S
巡拜や巡禮をハイキングといふのはどうかと思ひますが、今の青年子女のハイキングにもつとふつくらとした深みを持たせたい。

F
それはよいことですね。お寺が集會所となるばかりでなく、住職が更に積極的に、率先してことに當るやうにすれば譯なく出来さうな氣がします。

S
四人寄れば僧伽ありで、僧伽即ち和合の集團の最少限度は四人とされてゐる位だから、常會の時には僧伽の形式をとつて、お互に缺點を云ひ合ひ、これをお互に直し合ふやうに行つたら何うだらう。さうす



G れば「教へられたり、教へたり」の隣組がほんとに生きて来るのではないだらうか。隣組常會をこれからどう指導してゆく



か、などいふ問題は、われわれにとつて打つてつけの問題でせう。これは餘程よく考へて早く手をつけないといけないでせう。何しろ毎月一回づゝ開いて、近所隣りのお内儀さんも亭主も寄り集つて話をし合ふのですから、米や炭の配給や防空演習の

注意など事務的な話の済んだあとでは、必ず近所の噂が出る、僕の隣組などでは、或る家のお内儀さんの發議で、たまには美味

いものを食べに行きませう、といふ話も出れば、芝居を見に行く會をやりませう、といふ話も出たさうです。それも結構ですが、たゞそれだけに終つては困るでせう。まして隣組が、今までの井戸端會談みたいに、人の噂や悪口の會になつては大變です。

「教へられたり教へたり」の互助協和の精神が誰の胸にも満ち溢れてくるといふふうでないと……。隣組には宗教的な信仰的な指導がなければ長続きはしないのです。私の友人に「地藏信仰と隣組」といふ本を書いてある人があります。この人は地藏菩薩の慈悲の心持で隣組を指導していかうといふのです。面白いでせう。

A とに角常會が中心となり隣組が單位となつてこの難局を切り抜ければならぬのです。

から、われ／＼としてはこの常會で「おかげ様」といふ心持を以て協力し合ふやうにしなければなりません。要するにお念佛を唱え唱えて大政を翼賛してゆく心掛けでゆかねばなりません。

B 知恩報恩とお念佛が一番大切です。さうすれば物ごとに眞劍になるし、率先して事に當ることも出来ます。

C 俺だけといふ氣持をなくし、すべて願共諸衆生でゆかなくてははいけません。

A 「命を懸けて諸共に御親の心仰ぎつゝ淨き御國に参りなむ」といふ心持がそのまゝ大政翼賛、臣道實踐、職域奉公となるのであります。懺悔しつゝ感謝しつゝ理想を目指して生命の大道に沿つて念佛の中に生きるとき、滅私奉公と物資愛護と直生正命とが自然に生れるのではなからうか。要するに仕事の合間の念佛でなく、念佛の中に生きる覺悟が大切ではないでせうか。

(山崎善一畫)



佛教
修養

五重相傳の受け方

中 村 辨 康

一、五重相傳會の沿革

五重相傳と云ふのは五つ重ねの宗義を傳へる儀式を指し、淨土宗の獨特のものである。西山派にも時宗にも天台宗にもあるけれども、學者の研究に依れば、恐らく淨土宗制定以後のものであらうと云はれて居る。無論内容が異なるのである。夫々の立場があるであらうから今その穿索を爲さうとは思はない。然し一般に廣く行はれて居るのは獨り淨土宗のみであると云ひ得る程、淨土宗とは切つても切れないものである。

淨土宗に於いては、もと僧侶にのみ傳へて一百十四日間の行をしたものであり、享和文化の頃は掛錫四年を経たものに一百七日の練行を了へたものに五重相傳をし、更に四

年を経てまた一百七日の行をしたものに宗脈戒脈を授けたものであつて、中々やかましく非常に大切にして居たものである。これが一般に俗に相傳されるやうになつたのは何時の頃かよく分らないが、文明七年に三河大樹寺の勢譽愚底上人が、岡崎城主の松平親忠公に傳へたのが最も顯著な事實であつて、無論現今行はれて居るやうな「五重相傳會」でなかつたことは明らかである。

元來元和條目で在家には相傳しない定になつて居たけれども、在家の要求が切で、爲に隱密の間に段々流行し、遂には非法邪説が混在することになつたので、寶曆年中に増上寺の妙譽定月大僧正が結縁五重の傳目を選び、文化文政の頃に至つて漸く在家化導の五重綱格が定まつたのである。

五重とは初重を往生記、二重を末代念佛授手印、三重を

領解未代念佛授手印鈔、四重を決答授手印疑問鈔、五重を口授心傳と次第し、初重から四重までの宗書の内容を前六日間に講説し、第七日目に「要偈道場」と「密室道場」との二會に分つてその密室道場に於いて第五重の口授心傳をなすもので、相傳の相傳たる所以は、七日間全體ではあるけれども、特に第七日目の要偈道場九箇條、密室道場九箇條の傳目を相傳して念佛に對する確信を與へるものであるからである。

二、五重相傳の意義

其後僧侶への傳法日數は時代に應じて色々に變化したけれども、現在では前行を一週間、別行を二週間と定められて居る。然し一般信徒に對する五重相傳の日數は、初めから一週間であり今でも短縮は出来ないことになつて居る。

その具體的な受け方に就いては「授戒の受け方」に述べた通りであつて、大體變りがないので、之を省略するが、多數の人の中には第七日目が「正傳法」であるから、前の六日間は休んでも、第七日目に行きさへすればそれで事が足りるなどと考へて居る者も稀にはないとも云へない

が、それでは五重を受ける甲斐がないから、前以て五重の意義をよく心得、決して休むことのないやうにしたいものである。

五重相傳は念佛往生の信仰を確立する爲のものである。念佛の信仰は自分の無力さに氣付くことから初まるものであつて、此の反省なくしては決して信に到達することは出来ないから、第一着手として何うしても自分と云ふものをよく見極めなくてはならないのである。茲に初重大切さがある。此の故に初重は「知機」と云つて自分が果して往生可能の機根であるか何うかを反省する爲の資糧として説かれるのである。従つて初重の巻物である「往生記」の「難途往生の機」と「種々念佛往生の機」と中「難途往生の機」の十三種

- 一、念佛に精進して居ても憍慢心の強い人
- 二、念佛の徳が勝つて居るので人から歸依される爲に布施を受けて貪欲を生ずる人
- 三、信施を受ける罪が重なつて居る人
- 四、淨土を欣ぶ求むる心の弱い人
- 五、信心あるが如く無きが如き人
- 六、信心が一でなく決定しない人

七、信心に間斷のある人

八、常に疑ひのある人

九、雜縁に近づくことを好む人

十、理では納得しても偏執を改めない人

十一、內心不調で臨終に狂亂する人

十二、臨終の時惡知識に遇ふ人

十三、淨土の信仰に邪見を持つ人

の内、一と二と三は僧侶について云つて居るものであり、三から十三までは僧俗に通ずるものであるが、大概の人は四、五、六、七、八、九、十の何れかに關係のないものはないのである。よくよく反省して見れば、自惚れでない限り、四、五、七、九などは、何うも誰でも該當しさうである。さればと云つて信仰を捨てる氣にもなれない。そこで尙ほ進んで初重の御話を聽いて行くと、次ぎの「種々念佛往生の機」の中で、智行兼備念佛往生の機や、義解念佛往生の機や持戒念佛往生の機などは自分達の分でないから兎に角として、第四の破戒念佛往生の機の二種類、第五の愚鈍念佛往生の機の十六種類の中の若干は似て居るところもあり似て居ないところもあると云つた調子で稍やホツとすが、茲に自らの機根の拙劣なるを深く考へさせられるの

である。

然し初重は自己反省を促す爲の勸誡門であつて、自己の無力を信じて如來の悲願に心を向けさせるやうに説かれるものであるから、極めて大切であつて、説く人も聞く人も心から眞劍になつて説き又は聽かねばならぬものである。そこで「小消息」が、初重の結文として置かれてあり、そのお話を承ると、自分達のやうな下根下劣なものの爲に大悲の本願のあることがよく判り、五逆十惡の者と云へども、彌陀に歸し奉ることに依つて「必得往生」することが、深く心に刻みつけられ第二重へと心が展開されることになるのである。

第二重の卷物は淨土宗義の最も根幹をなすもので、第二祖鎮西上人が法然上人の選擇集を基礎にして書かれたものである。之れに念佛に對する安心起行作業の三を委しく説かれてあるから之を「行」と習ふのであるが、實は平生に於て何遍も聞き何遍も教へられたことであつて、別段耳新らしいことではない。唯だそれをまとめて承つて深く信行のいはれや、念佛の尊さ、心構へ、身構へなどを心腑に收め、さてそれらも結局は念佛の一行三昧に結歸することを、心から心へ傳へられるので、其證としての「手印」を

授けられる資格を具備するに至るのである。

従つて此の第二重の内容がシツカリ判らないと、五重を受けた甲斐がなく、また御話しする方でも特に時間を費やし、如何に聴者にわかり易く納得せしめ得るかに就いて多大の苦心を拂つて居るのであるから、充分落ちついて一言も聞きもらさぬやうに心掛くべきである。

第三重は「領解末代授手印鈔」と云つて第三祖記主良忠上人の述作であるが、第二祖鎮西上人から「授手印」を授かつたのは嘉禎三年七月六日で、記主上人はそれを受けて同八月三日に一卷の書を作つて鎮西上人に自分の領解したところを御覽に入れた、その書が之れである。だから第二重の宗義を「解」即ちよく諒解したと云ふ表示をしたものである。内容としては特に「三心」に力を入れてある。

第四重は「決答授手印疑問鈔」と云つて記主上人の作られた二巻の書である。之れは上總の鹿野山の麓、周東と云ふ地に住んで居る在阿と云ふ人が「授手印」に歸して念佛の信仰に入つたが、西山義や九品寺長西の義や長樂寺隆寛の義などを聞いて、いさゝか迷ふところがあつたので、法然上人に直接教へを受けた遠州の蓮華寺の禪勝房のところへ人をやつて疑問を質したがよく分らず、次いで相模の石

川に居る澁谷道遍に遇つて聞くと、法然上人の孫弟子である良忠上人が下總の九十九里の沿岸福岡の草庵に居らるゝから、そこに行つて質ねたらよからうと教へて呉れたので、康元二年正月十七日に草庵を訪ねて色々疑問を提出したのである。それでその質問に答へるべく筆を採られたのがこの書物である。門下への講説の餘暇に書かれたので三十日程かゝつたが、在阿は一々明確に疑問を解決して貰へたので、大いに喜び、早速相州石川の澁谷道遍を訪ねて之の書を示すと道遍も大變喜んでと云ふことである。此の書は非常にこまかく安心起行に就いて色々の疑問に決答を與へたもので、宗義を知る上に無くてはならぬ重要な書物であることは云ふまでもない。かの選擇集が熱心に道を求めた九條兼實公の求めに依つて書かれたのに對應して、同じく熱烈な求道者在阿の要求に依つて出来た宗骨の書籍として一對の美事であると云はれて居る。

普通に五重相傳に於いては、第三重の「領解鈔」と此の「決答疑問鈔」とはその内容に就いては講説されないやうである。第三重に於ては記主禪師の御傳記、第四重に於ては有名な「二河白道の話」などがなされて居る。此の第四重に於いて二河白道の話が持ち出されるわけは、此の決答

疑問鈔の中に、在阿が「三心具足して居る人ならば煩惱も起らず心行も立派でよい筈だと思ふのに、事實は現世に對する食欲は強く起り、往生の心行は極めて弱いが、これは一體何う云ふわけであらうか」と云ふ質問に對して、記主上人が「貪瞋等の煩惱は無始の初めから習ひ性となつて居るので強く起り、淨土を願ふ心は今度生れて初めて勵まされた心であるから弱いのである。然し貪瞋起るにつけても、たとへ細々として居るとは云へ唯だ一片のまごころを白道として眞直ぐにすゝむべきで、それは二河白道の譬へをよ／＼味はつて見るならば、弱い心行でも遂には目的を貫徹することが出來やう」と答へられたのに基いて居るからである。何れにせよ、此の第四重では、在阿が信を確定したやうに、私達もまた此時信を固められるので之れを「信」と覚え、第五重に於いて、更に二河白道の具體的な表現や淨土の八功德池の寶蓮臺上の有様などを示めされ、一層信を確かにすることが出来るので、第五重を「證」と教へられるのである。

三、授者としての心構へ

かくの如く五重相傳の目的は淨土への信を確立するにある。地方に依つては五重の巻物を宛かも極樂行きの免狀か切符のやうに心得て居る人もあるやうであるが、それは本當の心構へとは云はれない。それも廻向發願心の具體的な現れとして許されないこともないけれども、兎もすればあとはノホ、ンになり易い傾向になる。ノホ、ンになるのもよいが、大切な念佛を忘れ勝になる。即ち「自分は既に極樂行きの免狀を持つて居るからもう念佛しなくても安心だ」と云ふ氣なのである。誠に低い信仰であつて眞義に遠ざかつて居ると云はねばならぬ。

であるから是非共この五重相傳會の七日間にシツカリと信仰を樹立し、立派に如來様の御子として生れ更らせて頂きたいと念願して、身も心もきれいに念佛唱名にも、恭敬禮拜にも、説法聽聞にも、起居寢食にも充分勇猛精進すべきである。出來るならば一週間は道場につめきる位の覺悟が欲しい。家庭の都合や道場の都合もあつて一週間のおこもりは出來ないかも知れないが、若し都合がついたならば、たとへ自分一人だけでも詰め切れることを計畫すべきである。眞剣に道を求める人ならばそれ位のことを出來な筈はない。一生に一度と思ひ、眞に此の機會に確信を得る

やう一生懸命になれば、必ず他の人に數倍數十倍した效果を見るであらう。

若しそれが何うしても出来ない事情であるならば、せめて時間を厳守して禮拜や御話しには一心になつて聞き又はやるゝやう心掛けたいものである。それで若しお話しの中に判らぬところがあらば、勸誡師の暇を見て質ねる位の熱心さもあるて欲しいと思ふ。

また第七日(場合に依つては第六日の午後又は夜)に行はれる要偈道場の時「日課念佛の誓約」がある。「授戒會」の時にも「念佛戒」として重要な役割をなす「日課念佛誓約」があるが、この五重相傳の時は念佛そのものの信を確立するのであるから、むしろ中心的なものであり、四修の中の無間修として大切なものである。これなくしては五重相傳の價値を失ふことになる。それでは非共豫め自分出來得る數を定めて置いて、その時確實に誓約せねばならぬ。日課は一萬遍以上を以て上品とする。だから出來るならば誰でも一萬遍以上としたいが、然しさうもならねば大體可能的の數を誓ふべきである。徳川家康公でさへ五萬を誓ひ、駿府に隱居してからは六萬にしたと云ふ確實な文獻が残つて居る。戦場往來の人に於てさうである。決して私

達に出來ない筈はない。一生懸命にやれば一時間か一時間半で一萬遍は出来る。それを朝起きてから夜寝るまでなくづしにやるとすれば、さう大した問題ではないやうに考へられる。況んや生死の大問題を解決する鍵である念佛に於いてをやである。

此他まだ色々心得べきこともあるが、大體授戒會の時と同じであるから之を省略する。

若し機會があつたら萬障を差繰つて是非参加されんことを切望して止まない。

前田聽瑞氏近著「法然上人」

浄土宗讀本の著者の一人である前田聽瑞氏が、今度弘文堂から「法然上人」を出版され、一本を受けてその批評を求められた。見るからに瀟灑なスツキリした装祇であり、内容に於ても非常によく精練されて居る。

法然上人出世時代から筆を説き起して、如何にその時代が上人の如き偉大な宗教的天才を待望し要求したかを知るものを提示して居る。そしてその御一生としての概略が約七十頁、御信仰内容としての宗意安心が約八十頁、それへ年表を附して總計百八十三頁に具合よくまとめられてある。文辭流麗で読み易く、日本精神と結びつけて叙述されて居る點、現代の時相に適した近來の好著である。(中村辨庵)

編輯後記

◇櫻花一時に開いて、佳麗、備

漫の講辭を受けて如何にも誇らしげに見えます。しかし咲いたと思ふと惜しげもなく散つてしまひます。四季の内でも最も派手やかなこの季節にあつて櫻の花こそその代表的なものでありませう。

◇世界動亂の巷にあつて、何の國民も最後まで闘ひ抜かんと努力してゐます。そして結局勝利を獲得する國民は最も困苦に耐へ得た國民である筈です。

◇困苦缺乏に耐へ得るといふ點で支那の國民は今まで文明の利便を得ること少なく簡素そのまゝの生活をして來たものが多いだけに爲し易い利點を有してゐます。又或る國民は今日あるを期して、すでに數年前から困苦缺乏に耐へて來てゐます。

◇われ／＼はこれまで便利すぎた安易の夢が深かつただけに、今となつて一層の努力を要するわけです。今そんな餘裕はない筈です。

◇但し努力すると云つても枝葉末節のことに骨を折つては間違ひです。今そんな餘裕はない筈です。

◇物質欲や名譽欲しかない人が何時もいけないので、心の奥に信仰を持つてゐることが大切で

◇全ての行爲の根底に佛教精神特にお念佛を申す心が要求されてゐることは明かなことです。われわれは先づ和合僧伽を建設しようではありませんか。

◇吉田絃二郎先生から玉稿をいただきました。ます／＼先生の御健勝ならんことを祈ります。

◇江藤漱英師から「信の宗教」を寄せられました。同師からは近時特に色々と御指導をいただいたて

ゐます。深謝いたします。

◇花祭りの隨筆を特輯しました三木清、村田嘉久子、生田花世、金田明進諸氏からお忙しいところを玉稿をいただき感謝いたします

◇本會のために直接活動して下さつてゐる一水會の會員諸氏の一部を以て「われらの實踐」と題する座談會を催して下さいました。一水會はこれまで表面に出ず、内部にあつて獻身的に御後援下さつてゐます。

◇各方面の御援助により本會も漸次盛大になりつゝあります。衷心よりお禮を申し上げます。

◇廣告掲載については直接本會庶務にか、東京市京橋區銀座西六丁目正路喜社にお申込みなり、お問合せなりして下さい。

◇本會宛お問合せには返信料同封でお願ひします。

◇住所變更の場合は舊住所も併せ御明記下さい。

淨土 四月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十年三月十日印刷納本
昭和十年四月一日發行

(定價十二錢)

東京市芝區芝公園五號地一〇
編輯兼 眞野正順
發行人

東京市芝區芝公園十五號明照會館
印刷人 赤尾光雄

東京市牛込區圓町七
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人鐵仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

◎ (送料五厘)

會費 金一圓二十錢

(送料不要)

一ヶ年

法然上人鑽仰會刊行圖書(一部)

東京市芝區芝公園明照會館
振替口座東京八二一八七番

法然上人鑽仰會編 (菊版二〇頁總ルビ付)

念佛 定價二十錢
送料三錢

中村辨康著 (四六版八〇頁總ルビ付)

信仰讀本 定價二十錢
送料三錢

藤井實應編 (菊半載一四四頁總ルビ付)

法然上人法語抄 定價三十錢
送料六錢

佐藤春夫著 特製ノート型、天金
十二ボ総ルビ、三〇〇頁

法然上人 掬水譚 定價四圓五十錢
送料二十二錢

◇御注文には小爲替または送金と通信とを兼ねた振替利用が御便利です。

◇送料をお忘れなきやう願ひます。

◇端書での御注文はお断り致します。

生、死、佛、本願、信と行、念佛の集ひ、社會生活、女性、家庭生活念佛の意義の各項目に別けて本宗の新鋭が、一般讀者を目標に新鮮な材料によつて解説した念佛信仰の手引！

非常時局下、人心の確固たる統一を期する時、一道の光明燦然として信仰の正道を指示す。萬人のための宗教、淨土教の信仰を説くこの書こそ現代人が信仰の書。

信仰の珠玉凝つて一卷をなす。浩翰なる上人御遺文中より、現代生活に最も適切なるものを選んで句々金玉の聖句、これぞ生活の根底である。

大毎、東日兩紙に連載し百萬讀者を魅了した當代隨一の宗教文學、高き藝術の香氣と深き信仰の把持、小杉放庵畫伯の氣品高き挿畫と相まつて一大美術品！

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)
昭和十六年三月廿日印刷納本、昭和十六年四月一日發行

淨土第七卷第四號

定價金十二錢(送料)
外埠定價金十三錢